

# **市指定史跡 青塚古墳確認調査概報**

2019年3月

観音寺市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は平成 28 年度に「国指定史跡大野原古墳群等重要遺跡保存・活用検討委員会」の検討結果を受け観音寺市教育委員会が観音寺市内遺跡発掘調査事業で実施した市指定史跡青塚古墳の確認調査概報である。
2. 本概報では、香川県観音寺市原町に所在する青塚古墳を対象とした。
3. 現地調査は観音寺市教育委員会事務局 文化振興課 主事 丸本啓貴が担当し、同課職員神原晃および中田陽子の補助を得た。
4. 本書の執筆・編集は丸本啓貴が担当した。また、出土遺物の整理作業の一部は中田陽子が担当した。
5. 発掘作業には次の方々にご協力いただいた。(敬称略・順不同)  
加島力 石川剛 宇川育男
6. 挿図の一部に、「観音寺市都市計画図」1 (1/10000)・5 ~ 7・9 ~ 15・17・18 (1/2500)、「豊中町都市計画図」5 ~ 8 (1/2500)、国土地理院発行 1/25000 「観音寺」を一部改変して使用した。墳丘測量図は 1/400、トレンチ平面・断面図は 1/50、出土状況図は 1/10、1/20、出土遺物実測図は 1/3 を基本としている。図面の方位はすべて座標北で示した。また、実測図の縮尺はスケール表示を基本とした。
7. 出土品・図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局文化振興課で保管している。
8. 本事業の実施及び本書の作成にあたっては、地権者をはじめ次の方々より多大なご指導・ご援助を得た。記して謝意を表します。(敬称略・順不同)  
大久保徹也 高瀬要一 丹羽佑一 菱田哲郎 守谷貞和 久保道生 枝植宗尚 蔵本晋司  
松本和彦 乘松真也 信里芳紀 真鍋貴匡 竹内裕貴 大山裕矢 塩治琢磨 渡邊誠 高上拓 梶原慎司 三好勇太 小林逸夫 高橋宏俊 杉村秀樹 小林スミよ 小林文男 杉村達

# 目 次

## 本文目次

### 第1章 調査経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2

### 第2章 立地と環境

第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5

### 第3章 調査成果

第1節 各トレンチの概要	
(1) トレンチ1	8
(2) トレンチ2	11
(3) トレンチ3	13
(4) トレンチ4	18
第2節 出土遺物	
(1) 須恵器	21
(2) 墳輪	21
(3) 石棺片	23
第4章 まとめ	25

## 挿図目次

図1 旧測量図	2
図2 青塚古墳 墳丘測量図	3
図3 香川県図中における青塚古墳の位置	4
図4 周辺遺跡地図	6
図5 青塚古墳位置図	7
図6 トレンチ1 平面・断面図	9
図7 トレンチ1 莖石出土状況図	10
図8 トレンチ2 平面・断面図	12
図9 トレンチ3 平面・断面図	14
図10 トレンチ3 墳裾基底石出土状況図	16
図11 トレンチ3 墳輪列出土状況図	17
図12 トレンチ4 平面・断面図	19

図13 トレンチ4 墳裾基底石出土状況図	20
図14 出土遺物実測図（1）	22
図15 出土遺物実測図（2）	24

## 表目次

表1 出土遺物観察表	28
------------	----

## 図版目次

図版1-1 青塚古墳全景（北より）	32
図版1-2 青塚古墳 全景（南より）	32
図版2-1 トレンチ1 全景（西より）	33
図版2-2 トレンチ1 全景（東より）	33
図版3-1 トレンチ1 莖石検出状況（東より）	34
図版3-2 トレンチ1 西端掘削状況（西より）	34
図版4-1 トレンチ2 全景（南より）	35
図版4-2 トレンチ2 全景（北より）	35
図版5-1 トレンチ2 円筒埴輪（単独樹立）検出状況1（北より）	36
図版5-2 トレンチ2 円筒埴輪（単独樹立）検出状況2（北より）	36
図版6-1 トレンチ3 全景（北より）	37
図版6-2 トレンチ3 全景（南より）	37
図版7-1 トレンチ3 周濠埋土内 莖石転落石および埴輪片検出状況（南より）	38
図版7-2 トレンチ3 墳裾基底石検出状況（南より）	38
図版8-1 トレンチ3 墓輪列検出状況1（南より）	39
図版8-2 トレンチ3 墓輪列検出状況2（東より）	39
図版9-1 トレンチ4 全景（東より）	40
図版9-2 トレンチ4 全景（西より）	40
図版10-1 トレンチ4 墳丘検出状況（西より）	41
図版10-2 トレンチ4 周濠検出状況（東より）	41
図版11-1 トレンチ4 周濠埋土内 莖石転落石及び埴輪片検出状況（西より）	42
図版11-2 トレンチ4 周濠最深部検出状況（南より）	42
図版12 出土遺物（1）	43
図版13 出土遺物（2）	44
図版14 出土遺物（3）（石棺片）	45

# 第1章 調査経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯

青塚古墳は、観音寺市原町の一ノ谷池西畔を南北に沿う形で伸びる青塚集落の北部、三豊平野南半部の低丘陵地上標高30m前後に位置している。この古墳は昭和22年に石川巖氏によって墳丘測量図（以下、「旧測量図」と称する。）の作製が行われており、測量図から読み取れる現地の地割状況及び地形、表採された円筒埴輪片から、5世紀に築造された盾形周濠を配する帆立貝式前方後円墳と考えられてきた。墳丘部分は、三豊郡内において数少ない前方後円墳のうちのひとつである点を鑑み、昭和41年に市史跡に指定されており、丸山古墳（観音寺市室本町）とともに阿蘇凝結凝灰岩製の石棺を有した古墳時代中期の有力首長の墳墓であると評価されている。

平成27年、同市大野原町大野原に所在する椀貸塚古墳、平塚古墳、角塚古墳が「大野原古墳群 椗貸塚古墳 平塚古墳 角塚古墳」として史跡に指定された。このことを受けて、観音寺市教育委員会は、平成28年度より、大野原古墳群の成り立ちを考える上で視野に入れなければならない市内遺跡を重要遺跡として取り上げ、確認調査を進めていくことで保存活用のための基礎データの収集を図っていくこととした。大野原古墳群以外で重要遺跡と認識した5基の古墳（丸山古墳・青塚古墳・赤岡山古墳（赤岡山3号墳）・鐘子塚古墳・瓢箪塚古墳）のうち、青塚古墳はこれまで発掘調査は実施されておらず、古墳の墳形や規模、周濠の有無等は具体的に明らかとされていなかったことから、調査の優先順位が高いものと判断し、今回の確認調査を実施するに至った。

現在、青塚古墳は北側が水田と畑、南側は市道、東側と西側は宅地と接している。前方部には旧青塚自治会場が建っている。旧自治会場前は広場となっており、百手祭や秋祭り等を行う場となっている。後円部の裾部には石造物が一周巡るかたちで配置され、西側斜面には広場から登るための階段があり、平坦地となっている墳頂には厳島神社と祠が建っている。墳丘の周囲には盾形周濠状の地割を呈した水田と畑が巡っている。

また、旧測量図からは旧自治会場にあたる位置に、かつて「七觀音堂」という建物があつたことが読み取れる。旧自治会場内には仏像（底部に「不空綱索」と記されている）が安置されており、後円部の石造物にも七觀音に該当するもの（年号が確認できるもので一番古いものは弘化3年）が6基存在する。これらのことから、青塚古墳は少なくとも江戸時代後期から現在に至るまで、集落の信仰・祭礼の中心地としての役割も有していることが窺える。

## 第2節 調査の経過

先述のように、青塚古墳の測量図は、昭和22年に石川巖氏によって作製されたものすでに存在していた。この旧測量図は、等高線表記の測量図としては香川県内の研究者が作成した最古のものと考えられる墳丘測量図であり、図中には帆立貝形の墳丘とそれを取り囲む盾形の水田に加え、「円筒埴輪出土せしところ」という聞き取りによって得たと思われる情報と、密に並べられた埴輪の表現も書き込まれているなど、長らく青塚古墳の墳丘や周濠の形状、そして外表施設を示す基礎資料となっていた。しかし、測量調査から69年の歳月が経過しており、今回の調査トレンチの位置等をこの旧測量図に反映させることは難しい状況であったため、確認調査の前に測量図を取り直すこととした。測量調査は平成28年5月から7月にかけて実施した。墳丘測量図は、縮尺を50分の1、コンターラインは20cm間隔で平板を用いて作製した。

墳丘測量の結果、主軸長44.4m、後円部径34.4m、墳丘高4.1m、周濠幅5.6mという基本データを得た。今回作製した測量図を旧測量図と対比したところ、古墳南側の水田の端が削平を受けている点を除けば、地形や墳丘に大きな変化はないことが判明した。

作製した測量図から墳丘の主軸線と、それに直行するラインを括れ部付近が想定される位置に設定し、それらに沿う形でトレンチを4本配置した。

各トレンチの目的は以下の通りである。

- ・トレンチ1 後円部端の範囲確認
- ・トレンチ2 北側括れ部付近の墳丘裾の検出と、自治会館等の建設により、現状で墳丘上面が削平されているようにみえる箇所の墳丘の遺存状況の確認
- ・トレンチ3 南側括れ部付近の墳丘裾の検出
- ・トレンチ4 前方部端および周濠の確認

確認調査は8月11日より開始し、1月20日に完了した。なお、トレンチ1～3については、当初水田部にもトレンチを入れ周濠の範囲確認も行う計画であったが、天候不良とトレンチ内への浸水のため、実施しなかった。

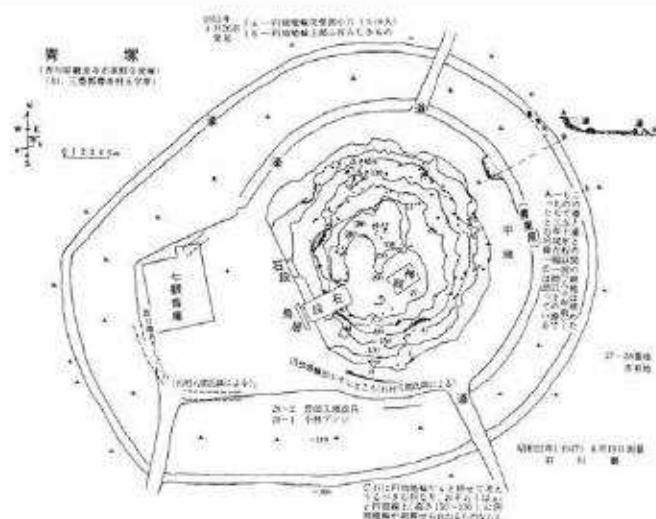


図1 旧測量図（『観音寺市誌』より転載）

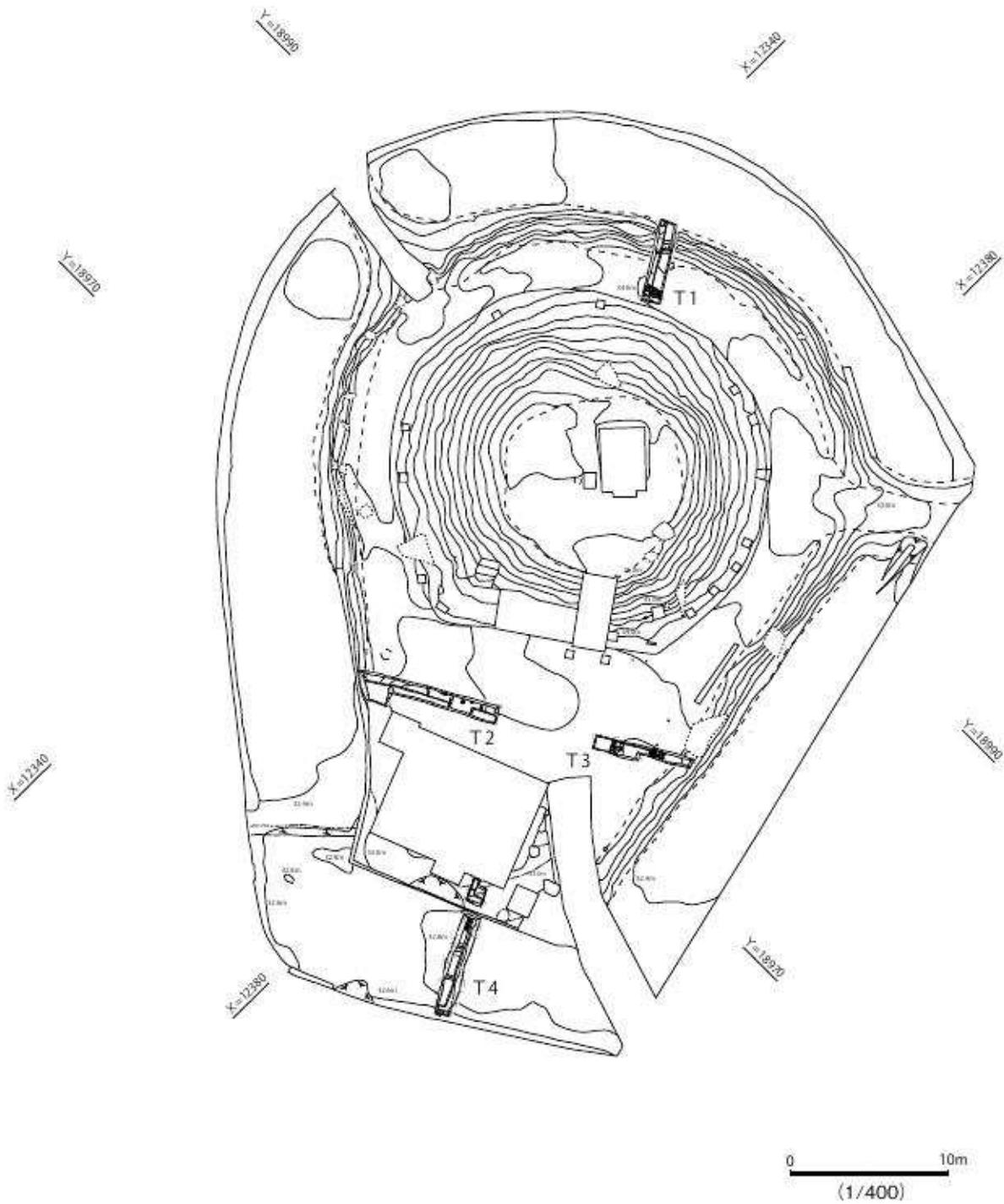


図2 青塚古墳 墳丘測量図

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

青塚古墳が所在しているのは、香川県の西部に広がっている三豊平野の南部である。東は雲辺寺山（標高 911 m）を主峰とする阿讚山系に、北は七宝山系、東は大麻山（標高 616.3 m）にとり囲まれ、西は瀬戸内海の燧灘に面している。主要河川は東西方向に横断する財田川と、阿讚山脈に源をもつ柞田川で、これらが形成した扇状地が中央部に広く展開している。

この三豊平野のうち、青塚古墳が位置しているのは、燧灘まで西に直線距離で 6.6 km の内陸部で、阿讚山系の菩提山から派生した低丘陵地の北部（標高 30 m 前後）にあたる。北には七宝山系を背景にして財田川左岸流域の氾濫原が、南には阿讚山系の麓から同一丘陵上の微傾斜地が広がっており、西には独立丘陵の母神山を認める。

青塚古墳の立地を眺望の観点から確認する。青塚古墳の位置は丘陵の先端部からやや内よりの場所にあたる。そのため、青塚古墳から北方向を眺めた場合、眺望できるのは丘陵の先端部までの限られた範囲であり、麓の財田川左岸流域と相互視認できる位置関係はない。一方、青塚古墳の南に目を向けると、先述のように阿讚山系の麓から微傾斜地が広がっている。現在、青塚古墳の周囲には住宅が立ち並んでいるが、本来は同一丘陵上の広い範囲からその姿を視認できたものと考えられる。そのため、青塚古墳の築造にあたっては、財田川左岸流域よりも、むしろ同一丘陵上における相互視認性を意識している可能性がある。

次に青塚古墳と他の主要な三豊平野の中期古墳との位置関係性や立地の状況を概観したい。青塚古墳から北西 6.3 km には、丸山古墳（観音寺市室本町）が所在している。青塚古墳とともに阿蘇溶結凝灰岩製の石棺を有している古墳であるが、その立地は燧灘に面した独立丘陵上で、海との相互視認性が意識されていることが窺え、内陸部に位置している青塚古墳と立地の面で異なる様相を呈しているといえる。一方、財田側を挟んで北に約 3.3 km 離れた地点には大塚古墳（三豊市豊中町）が所在している。相互に視認することはできないが、財田側を挟んでお互いに向かい合う位置関係にあたることから、同時期に築造された可能性が窺える。



図3 香川県図中における青塚古墳の位置

## 第2節 歴史的環境

青塚古墳を取り巻く歴史的環境について、三豊平野南部における古墳時代を中心に記述する。

古墳時代前期には、三豊地域において最大の前期古墳である鹿限罐子塚古墳（観音寺市高屋町）が七宝山南麓に見られるが、中期中葉に入ると海岸線に比較的近い独立丘陵上に丸山古墳（観音寺市室本町）が突如出現する。直径 35 m の円墳である丸山古墳は、四国最古級の横穴式石室を内包し、内部に阿蘇溶結凝灰岩製の剝抜式舟形石棺をもつ。

一方、内陸部では青塚古墳（観音寺市原町）が築造される。青塚古墳はその地割状況から周囲に盾形周濠をもつ全長 44 m の帆立貝式前方後円墳と考えられてきた。埋葬施設は未調査のため不明であるが、阿蘇溶結凝灰岩製の石棺片が見つかっており、丸山古墳との関連性が窺える。青塚古墳から北へ 3.3 km の位置にある大塚古墳（三豊市豊中町）は直径 17.75 m の円墳で、円筒埴輪列が裾を囲んでいる状況や葺石、周溝の存在が確認されている（塩治 2015）。また、内陸南部では直径 24 m の円墳と推定される赤岡山古墳（赤岡山 3 号墳）（観音寺市大野原町中姫）が独立丘陵上に築造されており、発見された竪穴式石室から銅鏡や管玉が出土している。

このように、古墳時代中期の三豊平野南部では、青塚古墳をはじめ、地域の首長墳といえる古墳が散見できるが、それらの造墓地は一定ではなく、安定した首長基盤の形成には及んでいない。古墳群の形成が本格的に行われるのは後期に入ってからであり、南部の母神山古墳群（観音寺市池の尻町、木之郷町、栗井町）で 6 世紀前半に三豊平野最大かつ最後の前方後円墳である瓢箪塚古墳、6 世紀後葉に複室構造の大型横穴式石室を備えた罐子塚古墳が出現する。そして巨石墳の築造は大野原古墳群（観音寺市大野原町大野原）へと移り、卓越した規模の墳丘と四国島最大級の横穴式石室を内包する 3 基の古墳（椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳）が 6 世紀後葉～7 世紀中葉にかけて連續して築造されるに至る。

なお、青塚古墳周辺には、近接して青塚遺跡と一の谷遺跡が所在している。このうち、青塚遺跡では、溝状遺構から弥生後期～終末期にかけての多量の土器片が出土しており、一の谷遺跡はピット一か所から弥生土器片が出土している。また、青塚古墳の北西 1.1 km には一の谷遺跡群があり、弥生終末期を中心とする竪穴住居跡が確認されている。このように、青塚古墳の周囲は弥生時代の集落も展開していたようである。

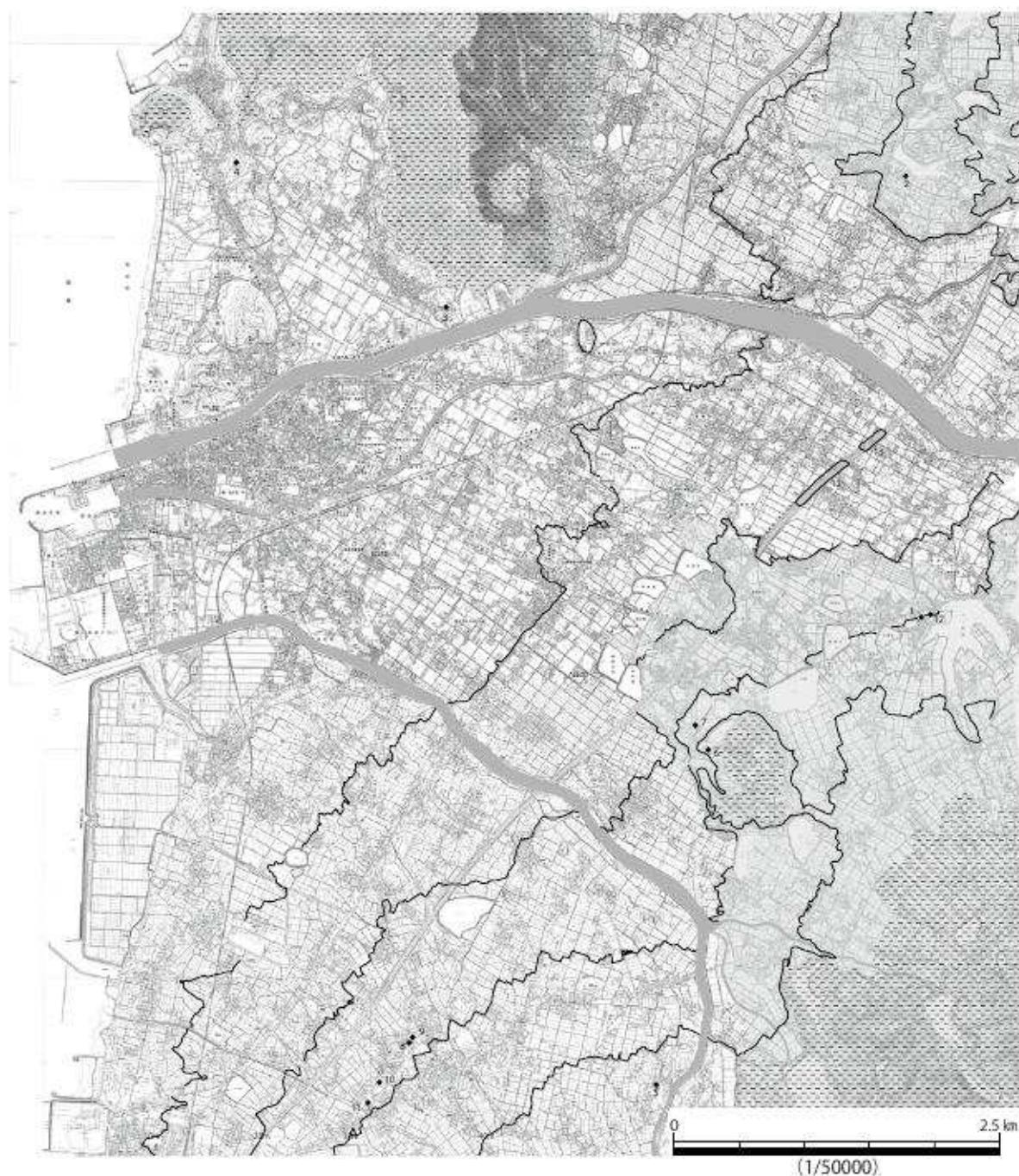


図4 周辺遺跡地図



図5 青塚古墳位置図

## 第3章 調査成果

### 第1節 各トレンチの概要

#### (1) トレンチ1

後円部端の範囲確認のため、後円部の北東側に幅1m、長さ5.3mのトレンチを設定し、調査を行った。トレンチの東端付近は現状の地割等から周濠部分に相当する位置にあたる。

##### 土層の堆積状況

現在の地表面から下に、1層は表土層、3層は現在の耕作土である。2層は褐色の砂質土で、ガラス片を包含していたことから、現代の造成土と判断した。4・5・6・7層は橙色や明褐色および黄褐色の粘質土である。層内には砂岩礫を多く含む。遺物は円筒埴輪片やガラス片、近代以降の陶磁器片を含む。また、少量であるが凝灰岩片や安山岩の板石も含まれていた。この内、凝灰岩片は過去に青塚で発見されている石棺の石材、砂岩礫は後述する葺石とそれぞれ同一石材で、層内に円筒埴輪片を含むことから、削平等後世の墳丘改変が行われた際の二次堆積土（造成土）と考えられる。そして、石棺材や石槨等埋葬施設の石材と思われる板石が含まれていることから、その改変は後円部墳頂に及んだ可能性がある。8層（黄褐色粘質土）・9層（褐色粘質土）の検出位置は水田内にあたり、水平堆積をみせること、遺物は瓦片等を包含していることから、近代以降の耕作土と判断した。

一方、10・13層（橙色粘質土）、12層（黄褐色粘質土）、11・14層（暗褐色粘質土）は、2・4・5・6・7層と比較して締まりの良い土質で、トレンチ東部に向かって水平方向を志向した互層状の堆積状況である。また、層中にはガラス片や陶磁器片等といった古墳築造時以降の遺物を包含しない。これらのことから、10～14層を墳丘と判断した。なお、10・13層は土器の細片と思われる赤褐色の小粒を包含していた。青塚古墳周辺では弥生時代の遺構が確認されていることから、墳丘に用いられている土が青塚古墳の近辺に由来するものであれば、弥生土器の小片が墳丘中に包含されていても違和感はない。

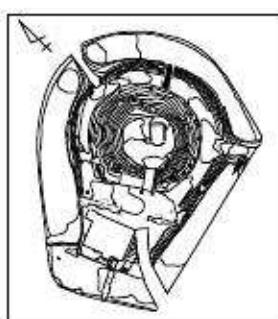
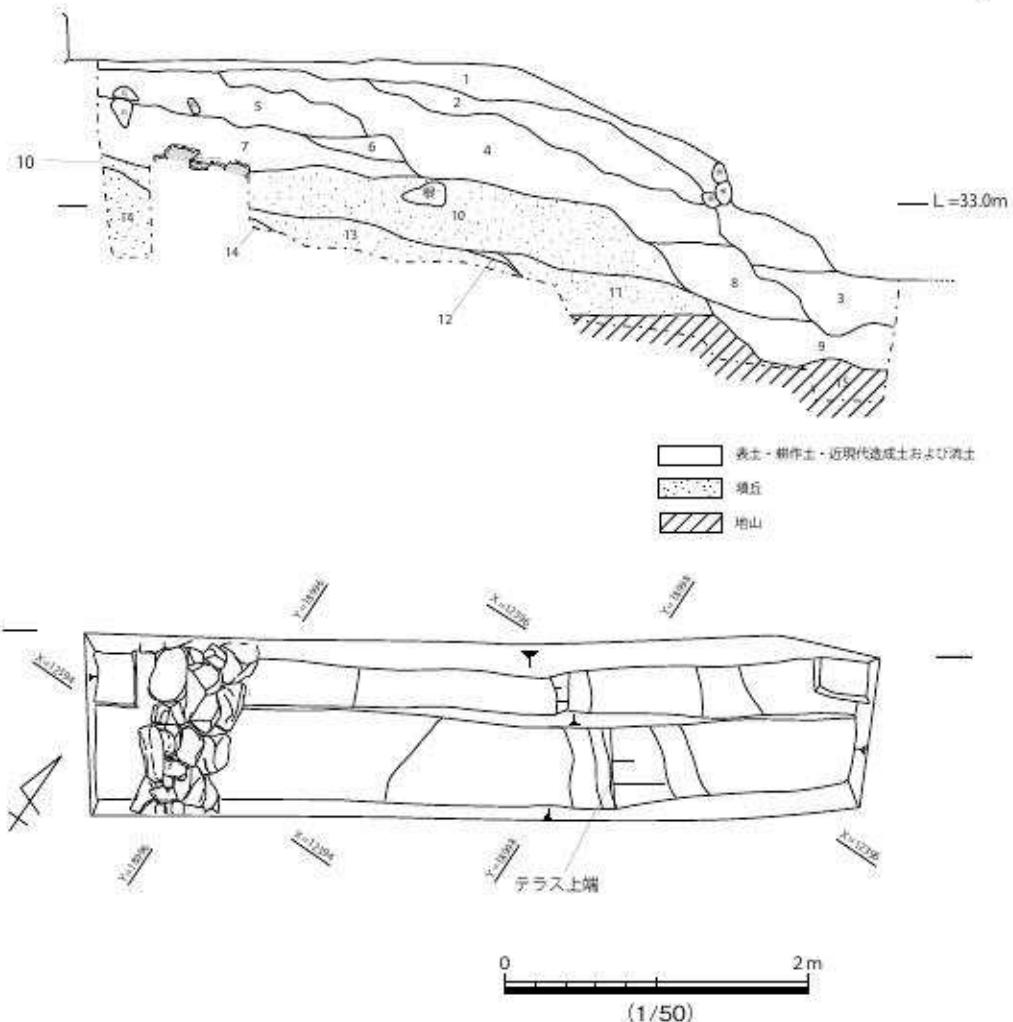
墳丘（10・11層）の東斜面において、葺石の存在は確認できなかった。これについては、もともと後円部第一段斜面が葺石を備えていないことや、本来設置されていた葺石が後世の削平を受け、転落もしくは抜取により欠損した状況が可能性として想定できる。トレンチ東端付近の調査範囲内では墳丘斜面部に周濠埋土のような堆積も見られなかった。なお、後述のトレンチ3・4では周濠埋土に包含される形で葺石基底石や転落石を確認している。そのため、トレンチ1の東側の水田内においてもそれらが存在している可能性がある。

##### 葺石の検出状況

トレンチ西端部において、長軸が約30～40cm程度の横長の砂岩質川原石を主とした石材集中を確認した。石材は南北方向に長軸を向けて、目地を揃えて隙間なく重なり合う形で墳丘の第1段テラス上面に設置されており、後円部第2段の外縁に沿うようにトレンチ外へと続いている。これらのことから、この石材集中は後円部第2段斜面部に設置された

W

E



トレンチ位置

表土	1 表土層	固く結まっている 強粘質 ガラス片を含む
耕作土	2 にふい褐色砂質土 (7.5YR5/3)	
近現代造成土および消土	3 耕作表土	
	4 橙色粘質土 (7.5YR4/6)	強粘質 塗輪片、陶磁器片、ガラス片、砂岩礫を含む
	5 黄褐色粘質土 (2.5YR5/6)	強粘質 塗輪片、陶磁器片、ガラス片、砂岩礫を含む
	6 橙色粘質土 (7.5YR6/8)	強粘質 塗輪片、陶磁器片、ガラス片、砂岩礫を含む
	7 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)	強粘質 塗輪片、陶磁器片、ガラス片、砂岩礫を含む
	8 黄褐色粘質土 (10YR5/6)	比較的締まりは悪い 強粘質 瓦片等を含む
	9 橙色粘質土 (10YR4/4)	強粘質 やや灰色がかった色調を有する 瓦片等を含む
	10 橙色粘質土 (7.5YR6/6)	比較的固く結まっている 強粘質 土器の小片を多数含む
	11 踏褐色粘質土 (10YR3/4)	固く結まっている 強粘質
	12 黄褐色粘質土 (2.5YR5/6)	固く結まっている 強粘質
	13 橙色粘質土 (7.5YR6/8)	固く結まっている 強粘質 土器の小片を多数含む
	14 踏褐色粘質土 (10YR3/4)	比較的固く結まっている 強粘質
填丘	15 地山	

図6 トレンチ1 平面・断面図

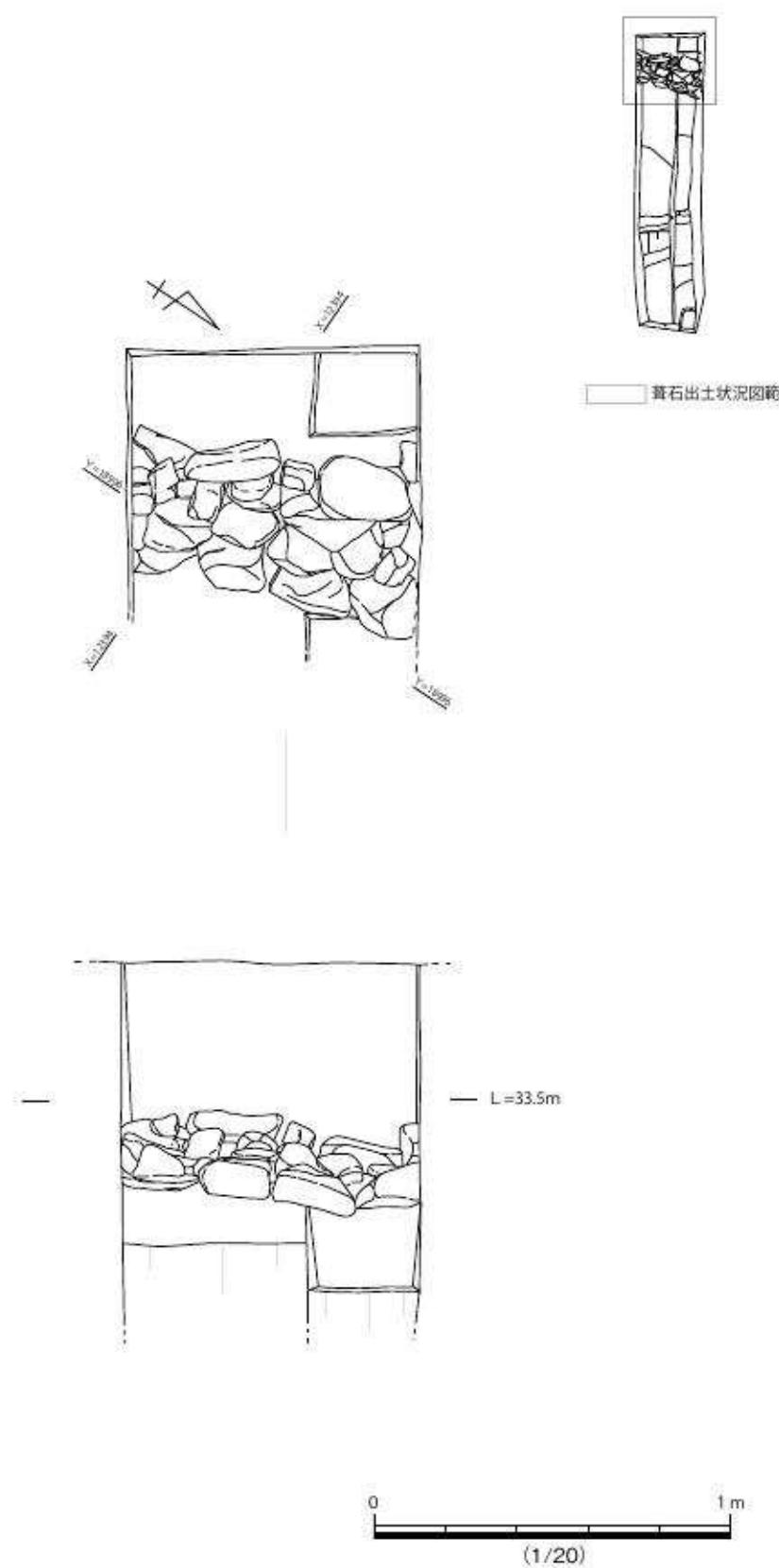


図7 トレンチ1 石出土状況図

葺石と判断した。検出した葺石は基底石を含む4段のみで、5段目以降は確認できなかつた。墳丘テラス上面（10層）と検出した葺石を被覆する4・5・6・7層中には同質の石材が多く含まれていたことから、上位の葺石は削平等後世の墳丘改変に伴い転落したものと思われる。

## （2）トレンチ2

北側括れ部付近の墳丘裾の検出と、旧自治会場等の建設により、現状で墳丘上面が削平されているようにみえる箇所の墳丘の遺存状況の確認を目的として、幅1～2m、長さ10mのトレンチを設定し調査を行つた。トレンチのうち、北半分について墳丘盛土や地山層まで掘削を行い、トレンチ南部の円筒埴輪据え付けが確認された箇所は西側へ拡張し、配置状況を追求した。

### 土層の堆積状況

1・4層は表土層である。2・3・5～9層は褐灰色もしくは黄色の砂質土および花崗土層でガラス片等を包含していたことから、旧自治会場前の広場北端の拡張に伴う現代の造成土と判断した。10～12層は水平に堆積した近代以降の陶磁器片を包含した褐色および黄褐色の粘質土で、耕作土と思われる。13～20層は比較的堅緻な黄褐色及び褐色系統の粘質土で、近代以降の陶磁器片や瓦片に加えて、埴輪片や須恵器片も包含していることから、旧自治会場建設等の後世の土地利用に伴い削平等の墳丘改変が行われた際の造成土と考えられる。

22層直上の21層は、1～3cm程度の小礫を多く含んだ明黄褐色の粘質土で、新しい遺物も含んでいないことから上位の後世の造成土とは区別できる堆積である。また、層中に粘土ブロックや弥生土器片を含まず、締まり具合もやや軟弱であることから、下位の22層（後述）とも区別できる堆積である。

また、トレンチ南部で円筒埴輪を検出しているが、本層上面において据え付けに伴う掘り形は検出できていない。22・23層は、それぞれ20cm程度の厚みをもった堅緻な粘質土である。堆積構造として径1～3cm程の粗い黄褐色粘土ブロックを多く含む。層中に弥生時代後期の甕片や弥生土器と思われる細片のみを認める。

トレンチ南半では22層上面に底部から10cm残存した円筒埴輪が据えられている状況を確認した。この円筒埴輪は底部から6cmが21層に埋まっており、21層が上位の後世の造成土と区別できる堆積で、遺物も含んでいないことや、上面において埴輪の据え付けに伴う掘り形も確認できなかったことから、21層は埴輪据え付けに伴う墳丘盛土であると考えられ、下位の22～23層も墳丘盛土と判断した。

### 墳裾及び埴輪に関する所見

本トレンチにおいては墳裾を確認することができなかつた。その場合には、樹立状態を保つ円筒埴輪とトレンチ中央で確認した墳丘盛土と考えられる22・23層との距離が離れていることが問題となる。

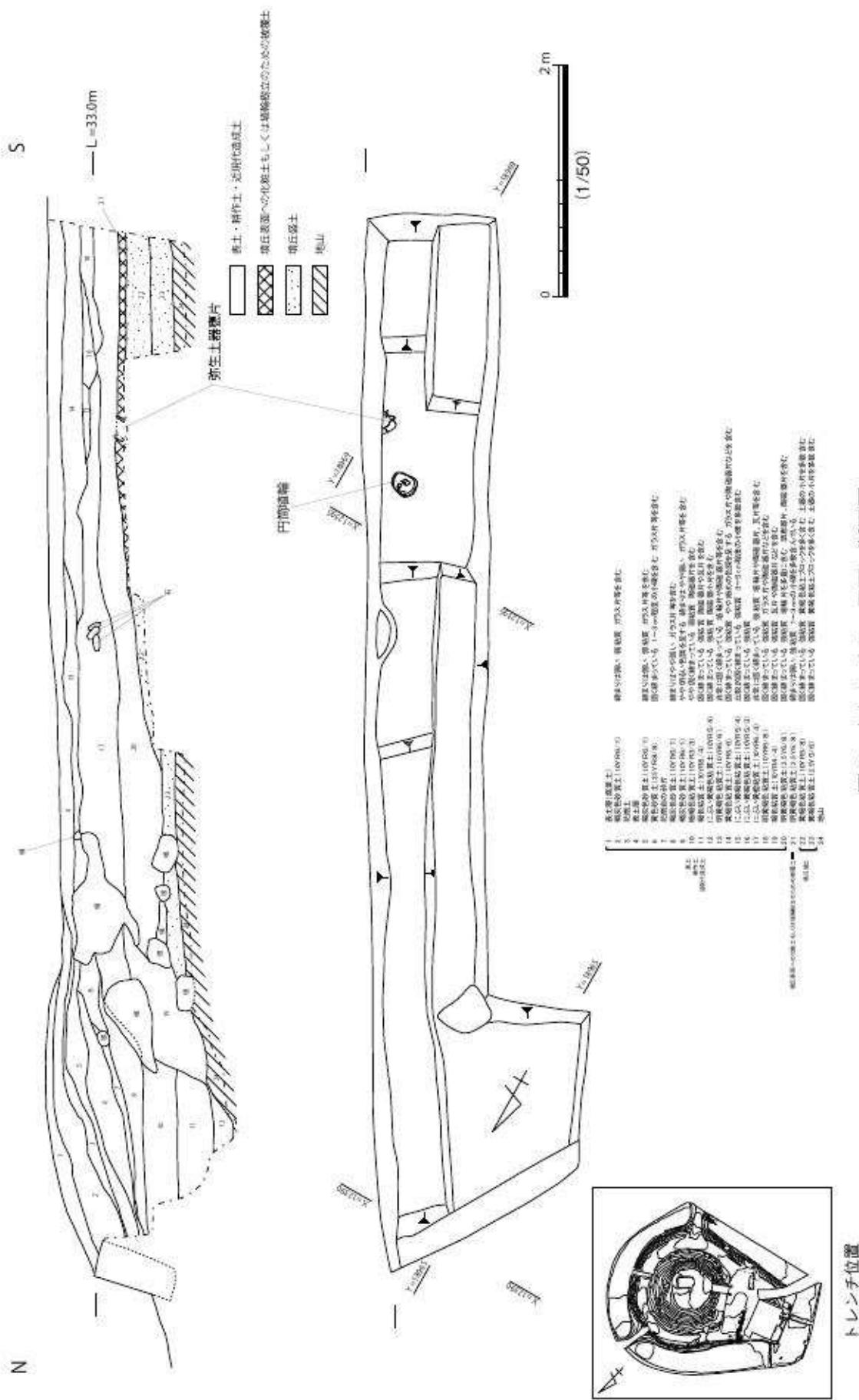


図8 ドレンチ2 平面・断面図

トレンチ位置

この点について、墳丘の主軸に対して直交方向にトレンチを設定していると仮定した場合、トレンチ北部の地山が露出する区間に墳丘裾があり、後世の改変（擁壁設置や自治会場建設）で消滅している状況が想定できるが、円筒埴輪と墳丘裾との距離がトレンチ3で検出した状況に比べて長くなるため、本トレンチで検出した埴輪は、トレンチ3のような第1段目テラスへの据え付けではなく、前方部における埴輪別区画等の存在を想定する必要がある。しかし、それに伴い埴輪据え付けに伴う盛土である21層を前方部最上面の盛土と解釈する必要があるため、前方部は1段築成での復元を想定することになる。

一方、本トレンチが後円部中心に対して斜めに設定した状況を想定した場合には、円筒埴輪が第1段目テラスに据えられたものであっても、墳裾との距離は必然的に長くなるため、本トレンチの全域が後円部に設定されることになるし、円筒埴輪と墳丘盛土の22・23層の距離が離れていても違和感はない。

いずれにしても、今回の調査範囲内で結論付けることは困難であり、今後の調査の課題としておきたい。

### (3) トレンチ3

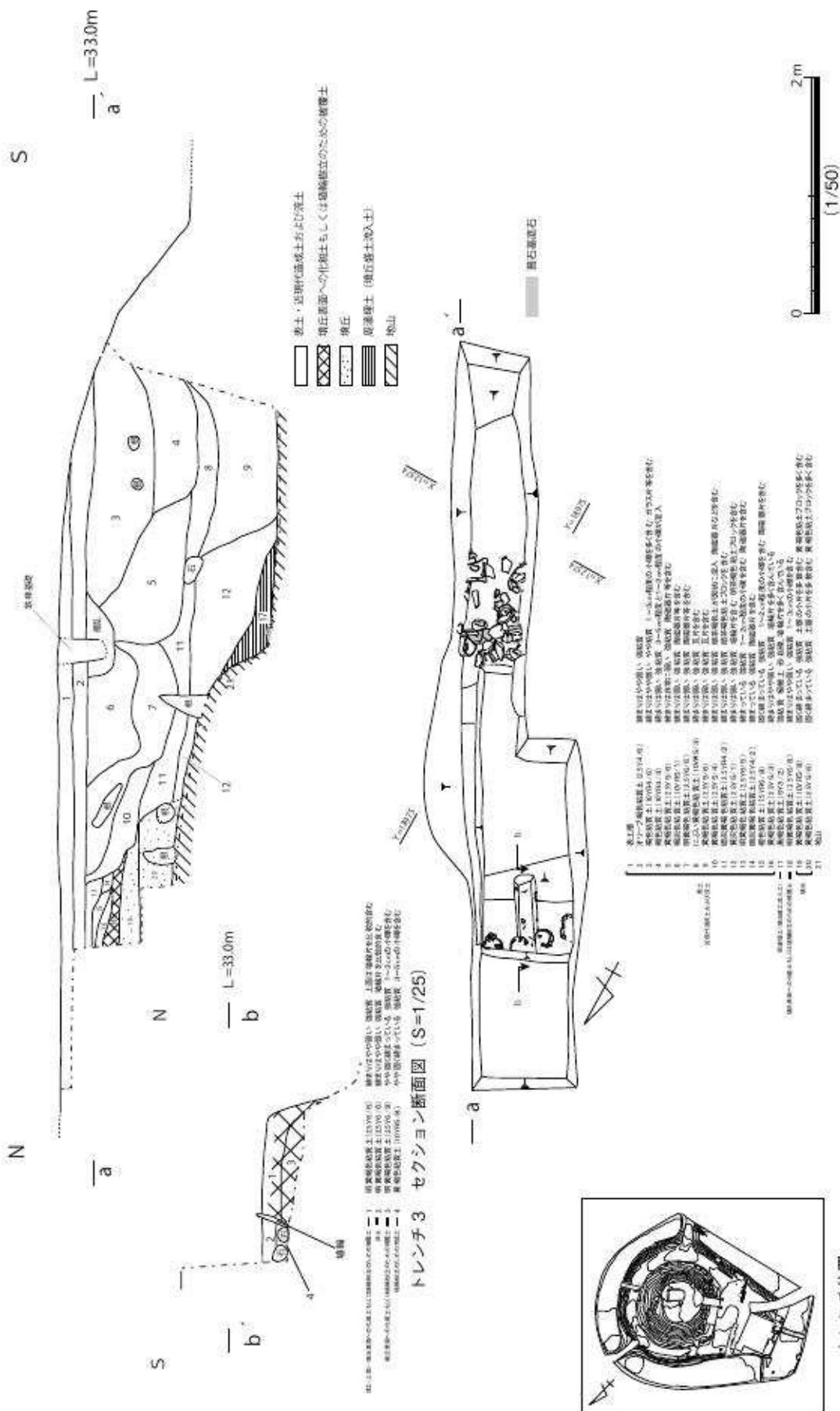
南側括れ部付近の墳丘裾の検出を目的として、幅0.5～1m、長さ4mのトレンチを設定し調査を行った。円筒埴輪列が確認された箇所はトレンチ幅を1mで掘削することで、その配置状況を追求した。

#### 土層の堆積状況

##### トレンチ北壁 (a-a')

1層は表土層である。2層は比較的締まりの弱い粘質土で、ガラス片等を包含していたことから近現代の造成土と判断した。3～10層は軟弱な粘質土で、ガラス片や近世～近代の陶磁器片および瓦片を包含する。造成土の層界が溝状に窪むところがあることから、繰り返し掘り込みが行われたことが窺える堆積状況で、旧自治会場前広場南端部の造成に伴う何らかの造作と思われる。11層は遺物を包含しない暗灰黄褐色粘質土で、12層は埴輪片を包含する黄灰色粘質土である。いずれも締まりの弱い粘質土で、墳丘の削平に伴う二次堆積土と考えられる。13～15層は堅緻な粘質土ではあるが、近代以降の陶磁器片をわずかに包含していることから、自治会場建設に伴う造成土と判断した。16層（黄褐色粘質土）はやや締まりの弱い土質であるも、埴輪片を包含していることから、同様に造成土と判断した。17層は地山直上へ堆積する黒褐色のきめの細かい粘質土で、上位の造成土と明確に区別できる。後述する葺石の基底石の直上にあり、大型の埴輪片や転落した葺石とみられる石材を多く包含することから、墳丘構築後の比較的初期の流入土と考えられる。

18層（明黄褐色粘質土）は後述するセクション東壁の1層と同様の土層であり、上面において円筒埴輪列を検出したが、据え付けに伴う掘り形は確認していない。19・20層は、トレンチ2の22・23層と同様に堅緻な粘質土で、径1～3cm程の黄褐色粘土ブロックを多く含む堆積構造をとる。遺物は弥生土器と思われる細片のみを包含している。トレンチ



2の21～23層と土質や堆積状況、遺物の包含状況、埴輪の据え付け状況が類似していることから、18～20層も墳丘盛土と判断した。

21層は地山である。非常に堅緻な堆積で、遺物は包含せず、3～5cm程度の風化礫を含む。  
セクション東壁（b-b'）

1層は比較的軟弱な明黄褐色粘質土で、上面は埴輪片を包含していたことから、流土と考えられる。埴輪はトレンチ北壁の19層に相当する堆積層の上面に据えられており、その上位には埴輪を据え付けるために1層上面より下層と3層（小礫のみを包含した明黄褐色粘質土）が8cmの厚みをもって設置されていたため、埴輪設置に伴う掘り形は存在していなかった。4層は黄褐色粘質土で、埴輪の内面底部に堆積していた。遺物は包含せず、3cm～5cm程度の礫のみが含まれていたことから、墳丘上に円筒埴輪を樹立させるための造作と思われる。

### 墳裾基底石

トレンチ中央部において、長軸約30cm、短軸約15cm、推定厚10cmの砂岩亜角礫を2石検出した。石材は地山直上の傾斜変換点に長軸を東西方向に揃えている。周囲には砂岩質の円礫が不定方向で散乱し、ともに18層に被覆された状態であった。以上のことから、2石の亜角礫石材は前方部南側の墳裾基底石、そして散乱した円礫は転落した第一段斜面の葺石と判断した。

### 埴輪列

トレンチ北端の墳丘上面において、5cm程度の間隔を空けて東西方向に並ぶ4本（埴輪A～D）の埴輪を検出した。4本とも底部から5～10cm程度が残存しており、1段目の突帯は欠損していた。埴輪Aは、直径17.5cm、残存高7.6cm、厚さ0.7cmで、焼成は良好であった。外面にタテハケ調整を認める。埴輪Bは直径15cm、残存高10.5cm、厚さ0.5cmで、焼成は良好であるが、外面調整は磨滅により確認できなかった。埴輪Cは推定径15cm、残存高9.6cm、厚さ0.5cmで、やや東に傾いた状態で樹立していた。焼成は不良で、外面調整は磨滅により確認できなかった。埴輪Dは残存高7.9cm、厚さ0.6cmで、器壁が割れて広がっていたが、かろうじて樹立していた。焼成は不良で、外面調整は磨滅により確認できなかった。

土層の堆積状況でも述べたが、埴輪内面へ礫を包含した土を充填することや、墳丘盛土を設置することによって埴輪を樹立させていたものと思われる。この埴輪列は直線に並ばず、南にやや外反し、円弧を描くように並んでいたことから、検出位置は、墳丘裾の括れ部に相当する位置にあたると考えられる。

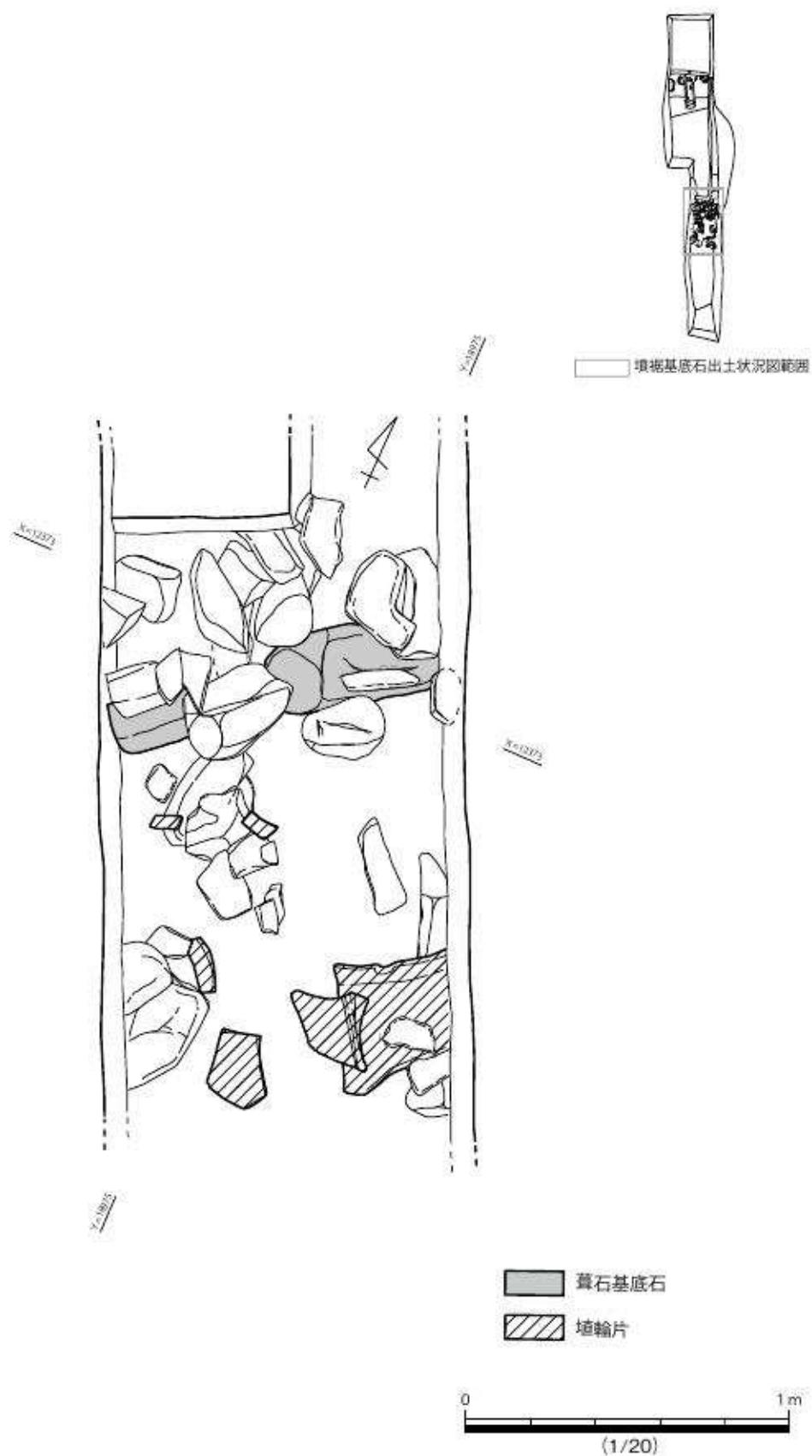


図 10 トレンチ 3 墓裾基底石出土状況図

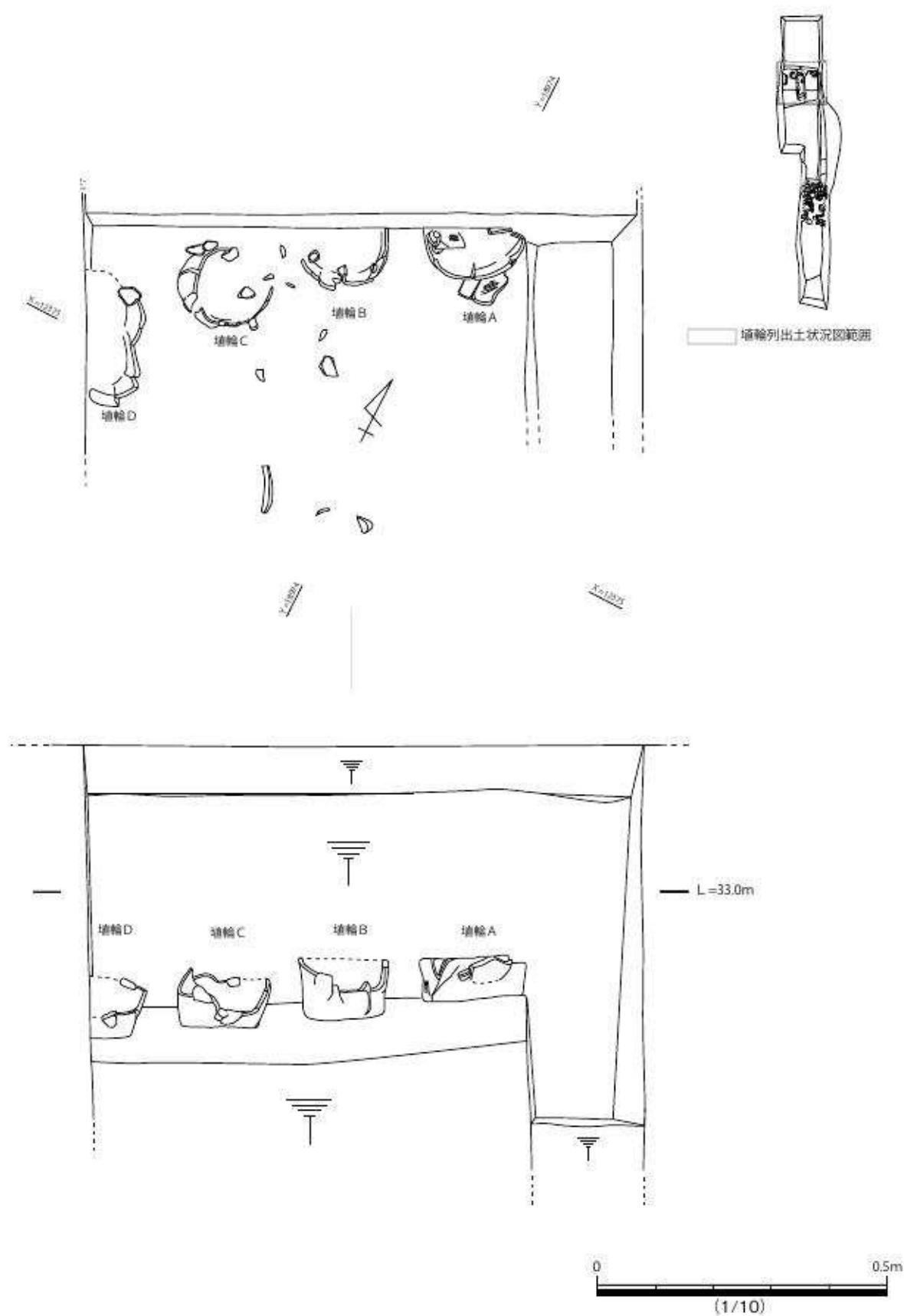


図 11 トレンチ3 墓輪列出土状況図

#### (4) レンチ4

前方部端および周濠の確認を目的として、旧自治会場建物脇から西側の空き地にかけて、幅1m、長さ8.8mのレンチを設定した。現状の地割等から、レンチ東端付近が前方部端、それ以外は周濠部分に相当する位置にある。

##### 土層の堆積状況

1・5層は表土層である。2層はガラス片を包含した比較的締まりの良い黄褐色砂質土で、自治会場建設に伴う造成土である。3層は瓦片を包含した灰黄褐色の堅緻な粘質土で、近世以降の造成土と考えられる。4層は砂粒の粗い、比較的締まった黄褐色粘質土で、後述の11・12層と土色や砂粒の粗さが似ていることから、墳丘が削平を受けた際に堆積した流土と思われる。6層は花崗土層で、水田耕作土上への造成土である。7層(黒褐色粘質土)・8層(にぶい黄褐色粘質土)・9層(明黄褐色粘質土)はいずれも強粘質の水平堆積層であることから、水田耕作土と判断した。

11・12層は堅緻な堆積層で、径1~3cm程の黄褐色粘土ブロックを多く含む堆積構造をとる。遺物は弥生土器と思われる細片のみを包含する。レンチ2の22・23層やレンチ3の19・20層と土質や堆積状況、遺物の包含状況が類似していることから、11~12層も墳丘盛土と判断した。

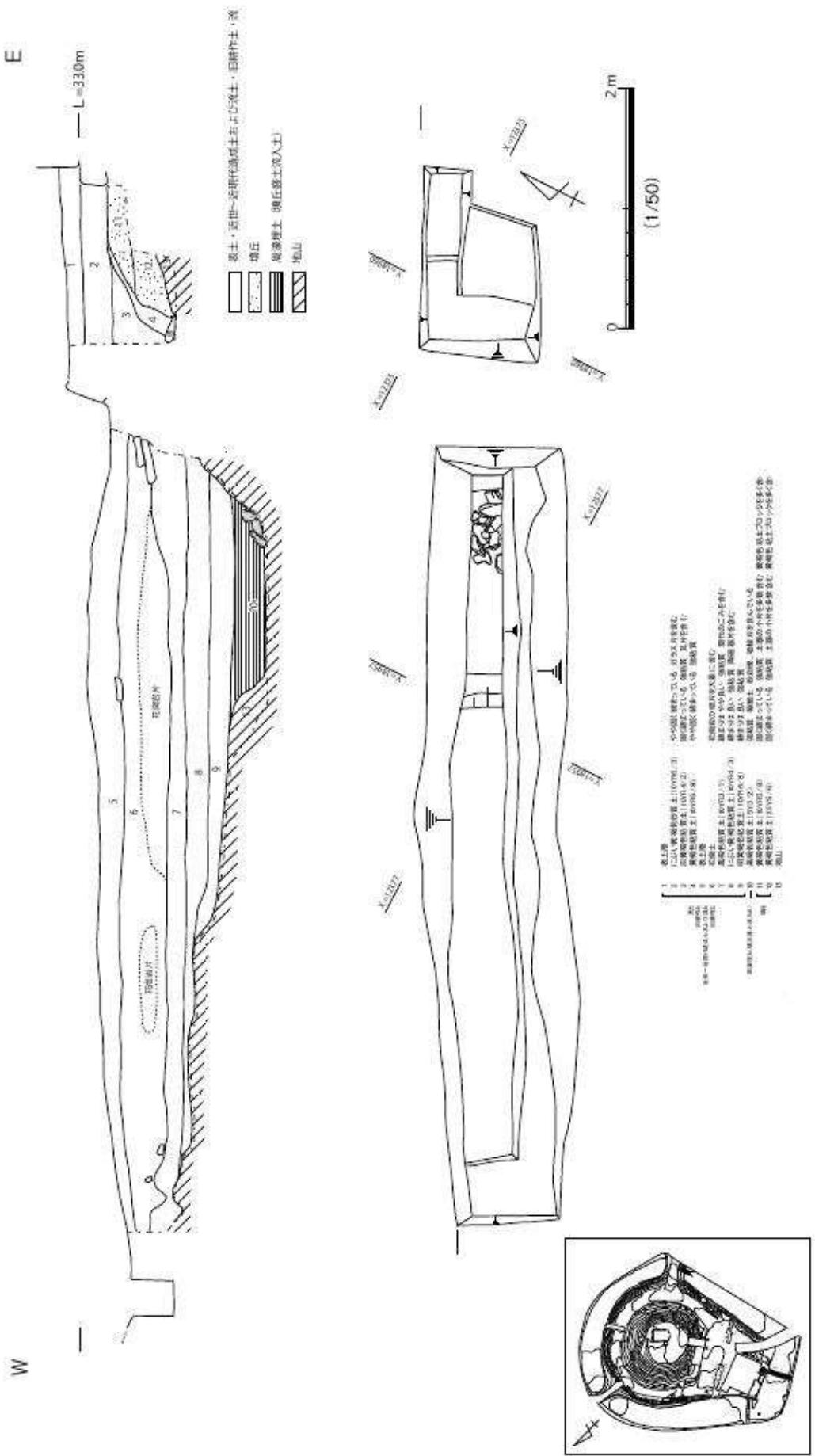
10層は地山直上に堆積する黒褐色の極細粒の粘質土で、上位の水田耕作土と明確に区別でき、埴輪片や転落した葺石とみられる石材を多く包含する。レンチ3の17層に土質や堆積状況、遺物の包含状況が類似していることから、10層も墳丘構築後の比較的初期の流入土と考えられる。

##### 周濠の堆積状況と断面形状

初期の墳丘からの流入土である10層が堆積する前方部側が幅約2mにわたって深く、それより西側は浅くなりテラス状になっている。テラス面は、西側へ約3.5m続いた後、再び浅くなりレンチ西端へ至る。テラス状の箇所には、初期の墳丘からの流入土である10層は存在せず、後世の水田耕作土と考えられる7~9層が堆積していたことから、本来の断面形状が失われていると考えられる。元来の周濠の断面形状が二段掘りであった可能性も考えられるが、確定は今後の調査を待ちたい。

##### 墳裾基底石

レンチ東端に長軸30cm以上、短軸約15cm、推定厚10cmの砂岩亜角礫を1石確認した。石材は地山直上において、長軸を南北方向に向いている。周囲には砂岩質の亜円礫が不定方向で散乱し、ともに10層に被覆された状態であった。レンチ内部への浸水のため、断ち割りによる検出に留めているため、レンチ3で検出した葺石基底石のように列を形成しているか確認することはできなかったが、亜角礫石材の検出位置と長軸方向は、地割の状況から調査当初より想定した前方部端部の墳裾ラインとしても違和感のないものであった。以上のことから、亜角礫石材は前方部端の墳裾基底石、そして散乱した円礫は転落した第1段斜面の葺石の可能性がある。



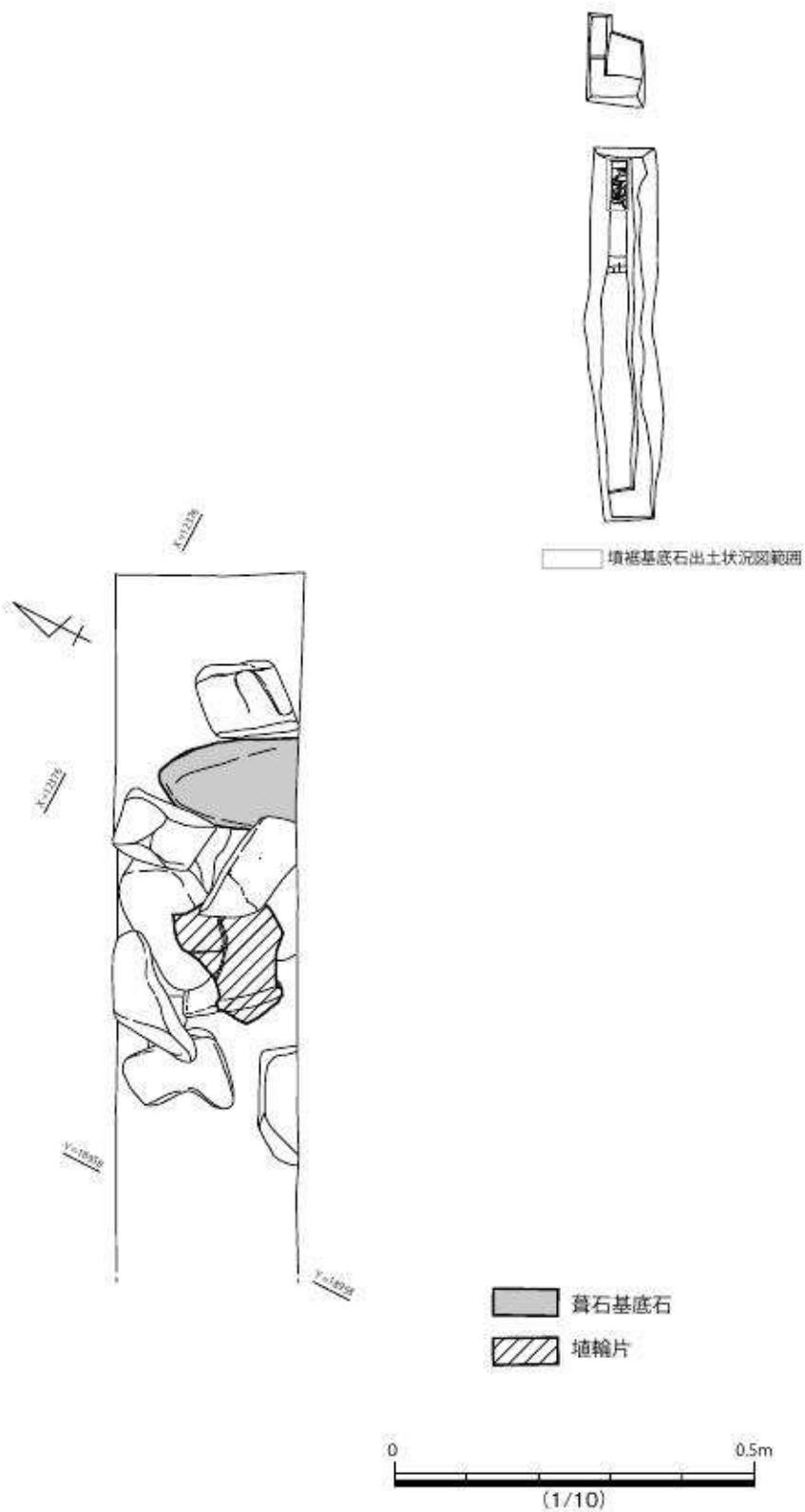


図13 トレンチ4 墓基底石出土状況図

## 第2節 出土遺物

### (1) 須恵器

#### 器台 (1)

トレンチ2の造成土中より出土した。鉢部と脚部をそれぞれ反転復元して図面上で合成した。器高23.6cm、脚底部径14.2cm、鉢部口縁部径27.8cmを測る。焼成は良好かつ文様が密に施された良品である。口縁端部はわずかに屈曲し、逆三角形状を呈している。鉢部の底部から体部にかけて、1～2条の沈線によって3段に区画されており、それに文様が施されている。上段では波状文を1列、中段ではカキ目を施文したのちに施された3列の波状文を認める。底部に相当する下段には4列の列点の文様帯と2条の沈線が施されている。脚部は比較的細い基部から「ハ」の字状に開いており、端部は三角形状を呈する。2～3条の沈線によって4段に区画されており、最下段を除いたそれとの区画には、4方向に穿たれているものと推測できる三角形の透かし穴と、密に施された波状の文様帯を認める。最下段の区画には施文は認められず、ナデ調整のみが施されている。

#### 器台 (2)

トレンチ2の造成土中より出土した。器台鉢部の口縁から体部と推測される破片である。焼成は良好である。口径は復元できなかった。口縁端部はつまみ上げ、三角形状を呈している。口縁部～体部内外面にかけてナデ調整が行われた後、体部に沈線と波状文が施されている。

#### 杯身 (3)

トレンチ1の造成土中より出土した。口縁部～受け部にかけての破片である。小片のため、口径は復元できなかった。立ち上がりは高さ1.4～1.5mmの間を測る明瞭なもので、外反しつつ内傾している。口縁端部は丸味を帯びており、受け部は幅6mmを測る。外面の立ち上がりから内面にかけて回転ナデ調整を認める。

### (2) 塙輪

#### 蓋形埴輪（軸受部～笠部）(4)

トレンチ3の周濠埋土中より出土した。図化にあたっては、破片実測を行った後に図面上で合成した後に反転復元を行った。蓋形埴輪笠部の軸受下端から笠縁にかけての部分に相当する。焼成はやや不良である。笠縁端部が欠損しているため、笠部径の数値は不明であるが、およそ40cm程度と推測される。軸受部下端径は11.2cmを測る。軸受部には横ハケ調整が施されているが、一部横ハケ調整の後に縦ハケ調整が認められる。軸受部下端には突起が貼り付けられている。笠部には布張り表現を持たず、全体に横ハケ調整が施されるのみである。内面は全体的に摩滅が激しいが、笠上半部に一部ユビオサエの痕跡が明瞭に残っている。

#### 蓋形埴輪（立ち飾り部）(5)

トレンチ2の造成土中より出土した立ち飾り部の小片である。焼成は良好で、表裏面に

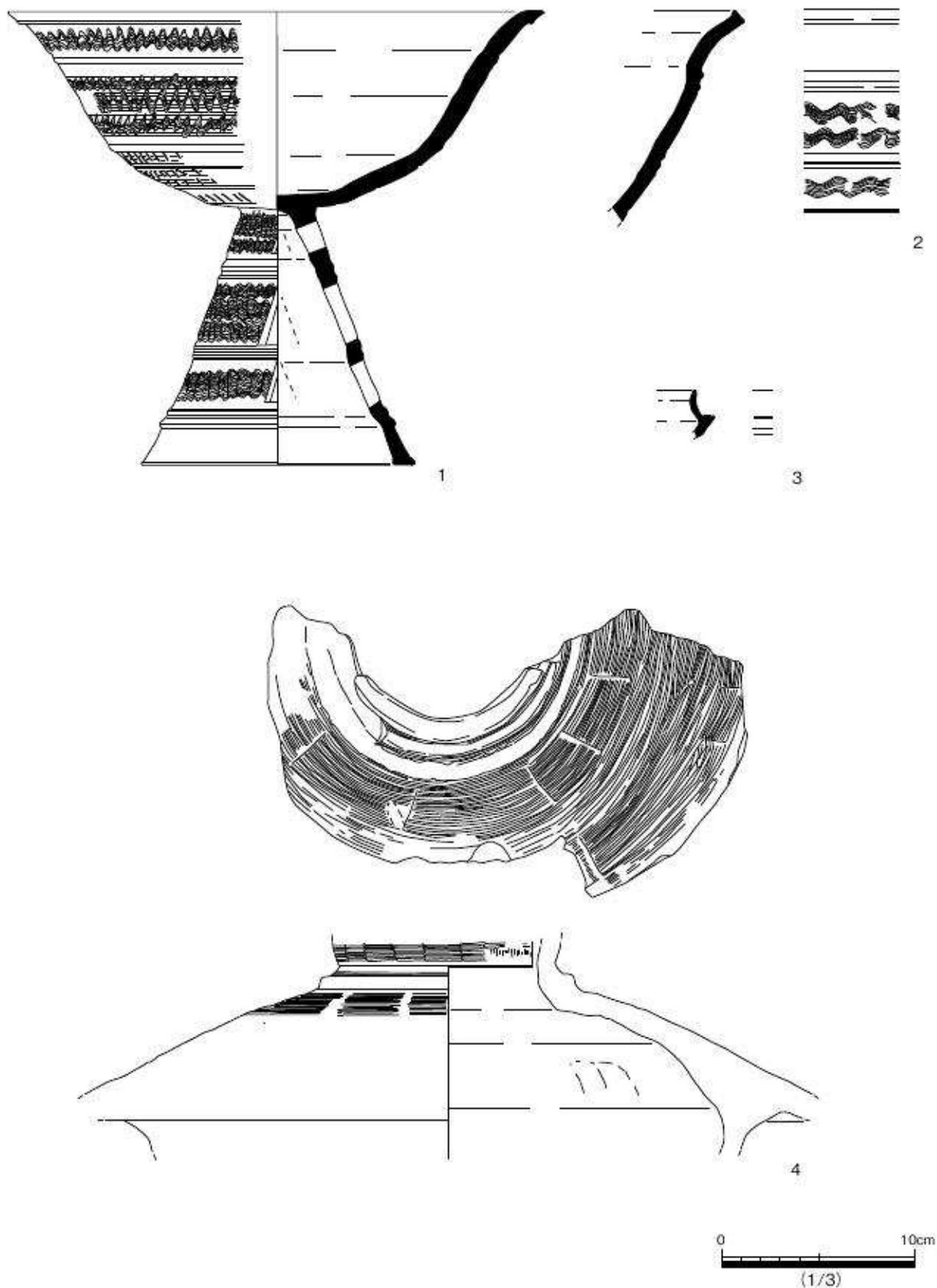


図 14 出土遺物実測図（1）

はナデ調整が施されるとともに、明瞭な単線による縦帯と、微かにそれに直交した単線による横帯が認められる。また、破片下端部は逆L字状に抉られたような形状を呈していることから、方形の透孔が穿たれている可能性を有する。

#### 円筒埴輪（6～9）

本調査出土品の多くが円筒埴輪の胴部片であった。小片かつ摩滅が著しいものが多くみられる中から、情報が比較的読み取れるものをピックアップして図化した。

6はトレンチ1より出土した胴部片である。外面にはタテハケによる一次調整の後、二次調整としてBb種ヨコハケが施されている。内面はタテハケ調整が施されているが、ナデによって消されている部分も観察できる。内外面ともに無黒斑である。7はトレンチ2より出土した。突帯の断面形状は台形状を呈している。外面にはBb種ヨコハケによる二次調整が施されているが、わずかにタテハケによる一次調整の痕跡も見られる。内面はタテハケ調整が施されている。内外面ともに無黒斑である。

8はトレンチ1より出土した胴部片である。円形の透孔をもつ。内外面ともに摩滅が激しいが、外面はわずかながらヨコハケ調整を観察でき、内面はナデ調整と思われる痕跡と、粘土紐の接合痕が確認できる。内外面ともに無黒斑である。

9はトレンチ3より出土した胴部片である。突帯断面はM字状を呈する。外面にはタテハケ調整が見られるのみであり、6・7・8のようなヨコハケによる調整は施されていない。内面はタテハケ調整とユビオサエの痕跡が観察できる。内外面ともに無黒斑である。

### （3）石棺片

トレンチ1の造成土中より出土した。石材は阿蘇溶結凝灰岩であり、過去に発見されている石棺片とともに同一個体を形成する可能性がある。長軸長26.5cm、短軸長23.5cm、最大厚13.5cmを測り、長軸方向の断面形状は台形状を呈している。一部スプーン状の加工跡と思しき痕跡も微かに観察できる。棺蓋の小口隅の部分に相当する可能性があるが、全体として摩滅が著しいため、現時点において部位の特定に至っていない。

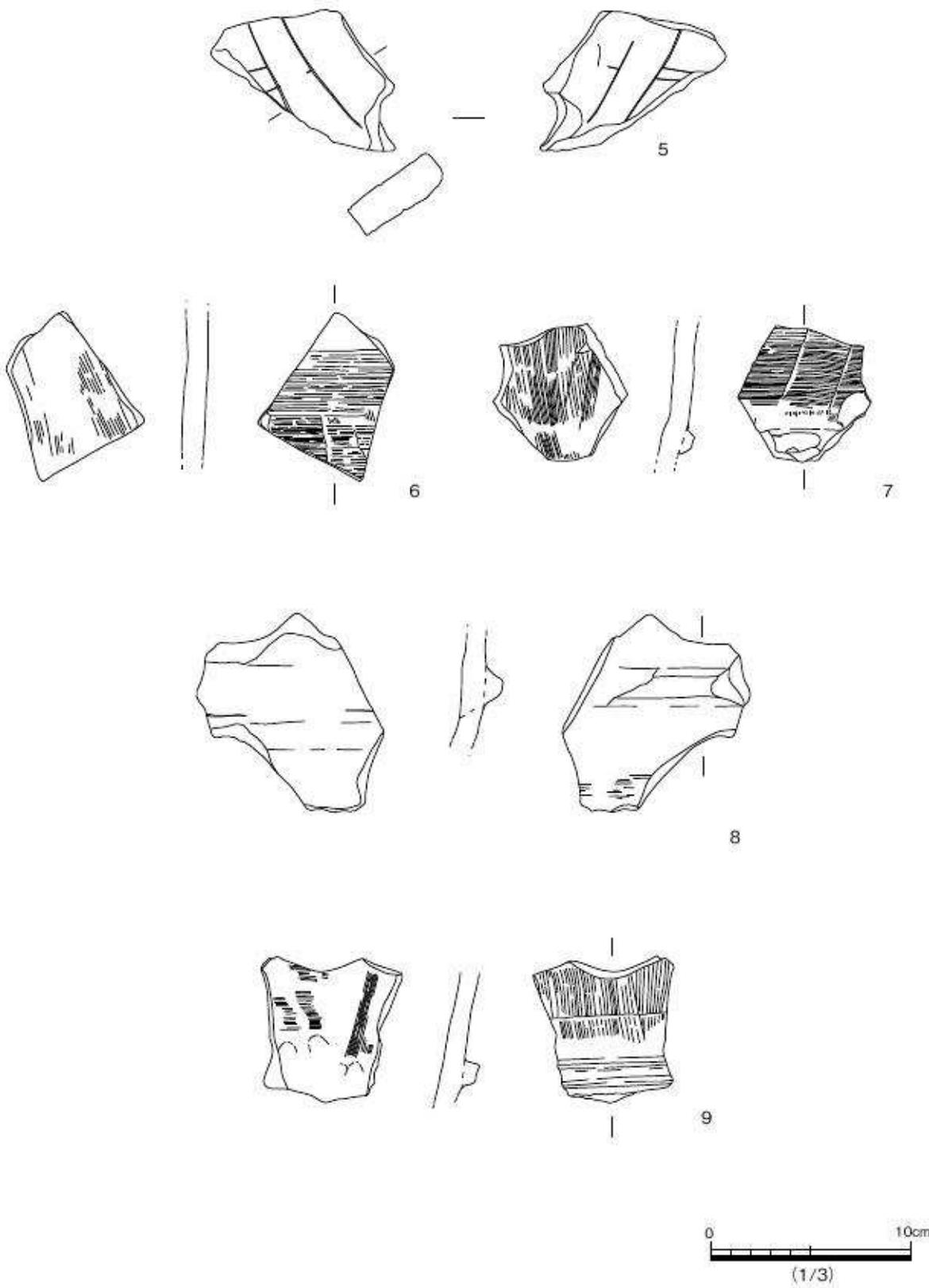


図 15 出土遺物実測図（2）

## 第4章 まとめ

青塚古墳は過去に発掘調査が行われておらず、その情報は現地の地割状況や、旧測量図、そして表採された遺物から得られるものに留まっていた。しかし、今回の確認調査を通じて墳形や外表施設、築造年代に関して新たな知見を得ることができた。

### (1) 墳丘及び外周施設

墳形は本調査において、前方部南側側面部と前方部端を検出したことから、従来言われてきた帆立貝式前方後円墳であることが確実となった。また、周濠も検出し、墳丘を取り巻く盾形状の地割が周濠の範囲や形状を反映している蓋然性が高まった。一方、今回の調査では後円部端を確認するに至らず、前方部の段数をふくめた墳丘の詳細な復元プランや周濠の断面形状については課題を残す結果となつたため、今後の調査を通じて明らかにしたい。

### (2) 外表施設

今回の調査において、埴輪列と葺石の存在が明らかとなった。埴輪列については、従来その情報は旧測量図中に記述された内容に留まるものであったが、本調査で前方部側面に密に据えられた埴輪列を実際に確認することができたことは大きな成果であった。一方、トレンチ2で検出した単独樹立の埴輪の性格については今回の調査では明らかにできなかつたため、前方部の復元も含めて今後の課題である。

葺石は、砂岩質の川原石の亜角礫や円礫が、前方部第1段斜面および後円部第2段斜面に設置されていたことを確認することができた。一方、後円部第1段斜面では葺石は確認できなかつた。後円部端の確認とともに、今後の調査課題である。

### (3) 築造年代

出土した須恵器と円筒埴輪の編年上の位置づけから青塚古墳の築造年代について述べる。

#### 須恵器の編年上の位置づけ

須恵器のうち、器種が特定できたものは、ほぼ完形の形で図上復元ができた高环形器台と杯身の小片であった。器台は、外面が沈線や波状文等による加飾性が強く、脚部には三角形の透孔が四方に施されたもので、TK208号窯式に相当するものと思われる。一方、杯身については、丸く納めた口縁部形状や立ち上がりの高さからTK47号窯式と考えられ、両者の間には編年上の時期差が生じる。

#### 円筒埴輪の編年上の位置づけ

今回出土した円筒埴輪の胴部は、無黒斑で、しっかりととした台形もしくはM字形の突帯

を有し、外面二次調整にはBb種ヨコハケ調整が施された資料が認められる。また、円形の透孔が判別できるものも含まれていたことから、川西編年（川西 1978）のIV期に相当するものと考えられる。

本調査で出土した円筒埴輪、須恵器それぞれの編年上の位置づけについて述べた。山田邦和は西日本における古墳時代の須恵器編年をI前期・中期・後期、II前期・後期、III初期・前期・後期に大きく区分した上で、川西の円筒埴輪編年との対比を行っており（山田 2011）、高藏寺208号窯式と216号窯式が含まれるI中期を円筒埴輪IV期に、高藏寺47号窯式および23号窯式が含まれるI後期を円筒埴輪V期に対応させ、I中期の実年代を5世紀中葉から後葉、I後期の実年代を5世紀末葉から6世紀初頭に比定している。本調査ではV期に該当する円筒埴輪が確認できなかったため、杯身片は古墳築造後に何らかの要因によって混入したものである可能性が高い。このように、須恵器と円筒埴輪の編年上の位置づけから、青塚古墳の築造時期を5世紀中葉～後葉の間に比定できる。

#### （4）青塚古墳の保存を巡る経過

第1章で述べたように、青塚古墳は地形上において墳丘部分と視認できる範囲が市指定範囲となっていた。しかし、観音寺市教育委員会では、今回の発掘調査を通じて墳形が特定できしたことや、墳丘の周囲に周濠が存在することが明らかとなったことを受け、これまで未指定範囲であった水田部分に対しても保護措置をとる必要があるものと判断し、平成29年9月27日に市指定範囲へ追加指定を行った。このように、青塚古墳に関して全般的な保全が図られる方向へと進んでいるが、青塚自治会の文化財保護に対する理解と協力なくしては実現しなかったことであった。青塚自治会には、そのために多大な迷惑をかけたことをお詫びするとともに、この場を借りて感謝申し上げたい。

以上のように、青塚古墳は、丸山古墳及び大塚古墳、並びに赤岡山古墳（赤岡山3号墳）とともに三豊平野における古墳時代中期の盟主墳系列を構成する古墳である。今回の確認調査は小規模なものであったが、墳形や外表施設、並びに須恵器等の築造時期を推定できる資料が得られたことは大きい。

一方で、詳細な墳形、墳丘構造には不明な点が多く、今後とも確認調査を継続して実施、丸山古墳等の他の古墳を含めた歴史的価値付けを行っていきたい。

## 参考・引用文献一覧

- 塙治琢磨 2015『大塚古墳 山王山古墳 紫雲出山遺跡 - 平成 26 年度国庫補助事業報告書 -』三豊市埋蔵文化財発掘調査報告書 第 8 集 (三豊市教育委員会)
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号 (日本考古学協会)
- 観音寺市誌増補・改訂版編集委員会編 1985『観音寺市誌』(観音寺市)
- 久保田昇三 1999「平成 10 年度国庫補助事業報告書 丸山古墳」「観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書」(観音寺市教育委員会)
- 久保田昇三 2000「平成 11 年度国庫補助事業報告書 丸山古墳 II」「観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書」(観音寺市教育委員会)
- 久保田昇三 2006「一ノ谷遺跡試掘調査報告書 高塚発掘調査報告書」「観音寺市埋蔵文化財調査事業概要報告書」(観音寺市教育委員会)
- 久保田昇三 2007「青塚遺跡試掘調査報告書 藤目城確認調査報告書」「観音寺市埋蔵文化財調査事業報告書」(観音寺市教育委員会)
- 久保田昇三 (編)・丹羽佑一・大久保徹也・菱田哲郎 2014『大野原古墳群 I (椀貸塚古墳・平塚古墳・角塚古墳)』観音寺市内遺跡発掘調査事業報告書 15 (観音寺市教育委員会)
- 新修 大野原町誌編さん委員会編 2005『新修 大野原町誌』(大野原町)
- 西岡達也 (編)・片桐孝浩・岡田義明・渡辺誠・三辻利一 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第 7 冊 一の谷遺跡群』(香川県教育委員会・(財) 香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団)
- 松木武彦 2004「家形埴輪・器財埴輪」『考古資料大観 第 4 卷』(小学館)
- 山田邦和 2011「須恵器の編年(1) 西日本」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』(同成社)

表1 出土遺物観察表

## 須恵器

報告番号	出土トレンチ	層位	種類	器種	部材	計測値			調整		色調		胎土	焼成	保存率	備考
						高さ	口径	底径	外面	内面	外質	内質				
1	トレンチ2	造成土	須恵器	蓋合	鉢形一脚鉢	(23.6)	(27.8)	(14.2)	縁部：回転ナギ、力口目、刃線、波状文、列点文、底部：回転ナギ、刃線、波状文	ナギ	灰(4/1)	灰(2/1)	1~2mmの長石・石英	青	1/4	
2	トレンチ2	造成土	須恵器	蓋合	鉢形口昇器一体鉢	—	—	—	回転ナギ、刃線、波状文	ナギ	灰(5/1)	灰(2/1)	1~2mmの長石・石英	青	小片	
3	トレンチ1	造成土	須恵器	杯身	口縁部一 体部上半	—	—	—	ナギ	ナギ	灰(6/1)	灰(2/1)	1mm以下の長石・石英、黒色粒	青	小片	

## 形象埴輪

報告番号	出土トレンチ	層位	種類	器種	部材	計測値			調整		色調		胎土	焼成	保存率	備考
						高さ	口径	底径	外面	内面	外質	内質				
4	トレンチ3	削落 埋土	埴輪	蓋	笠部 (輪突部下端-笠端)	—	(11.2) (輪突部下端)	輪突部下端：ヨコハケ後 タテハケ 笠部：ヨコハケ	ユビオサエ	淡黄褐 (GYR 8/4)	淡黄褐 (GYR 8/4)	1mm以下の長石・ 石英、黒色粒	軟質 土跡質	1/2		
5	トレンチ2	造成土	埴輪	蓋	立ち飾り鉢	—	—	—	絞刻、ナギ	—	にぶい橙 (2.5YR 6/6)	—	1mm以下の長石・ 石英、黒色粒	提質 土跡質	小片	

## 円筒埴輪

報告番号	出土トレンチ	層位	種類	器種	部材	計測値			調整		色調		胎土	焼成	保存率	備考
						高さ	胴部径	突堤高	外面	内面	外質	内質				
6	トレンチ1	造成土	埴輪	円筒	胴部	—	—	—	タテハケ後ヨコハケ	タテハケ 後ナギ	にぶい橙 (2.5YR 6/6)	にぶい橙 (2.5YR 6/6)	1mm以下の長石・ 石英、黒色粒	提質 須恵質	小片	
7	トレンチ2	表土	埴輪	円筒	胴部	—	—	0.5	タテハケ後ヨコハケ	タテハケ	橙 (GYR 6/6)	にぶい橙 (GYR 6/6)	1mm以下の長石・ 石英、黒色粒	提質 須恵質	小片	
8	トレンチ1	造成土	埴輪	円筒	胴部	—	—	0.9	ヨコハケ	ナギ	橙 (2.5YR 6/6)	橙 (2.5YR 6/6)	1mm以下の長石・ 石英、黒色粒	軟質 土跡質	小片	透孔 (内部)
9	トレンチ3	—	埴輪	円筒	胴部	—	—	0.7	タテハケ	タテハケ ユビオサエ	橙 (2.5YR 7/6)	灰白 (7.5Y 7/1)	1mm以下の長石・ 石英、黒色粒	提質 須恵質	小片	

観察表中において、特に単位を示さない場合、数値はcmを単位とする。(カッコ内の数値は復元数値)



# 写 真 図 版

---





図版 1-1 青塚古墳 全景（北より）



図版 1-2 青塚古墳 全景（南より）



図版2-1 トレンチ1 全景（西より）



図版2-2 トレンチ1 全景（東より）



図版3-1 トレンチ1 葦石検出状況（東より）



図版3-2 トレンチ1 西端掘削状況（西より）



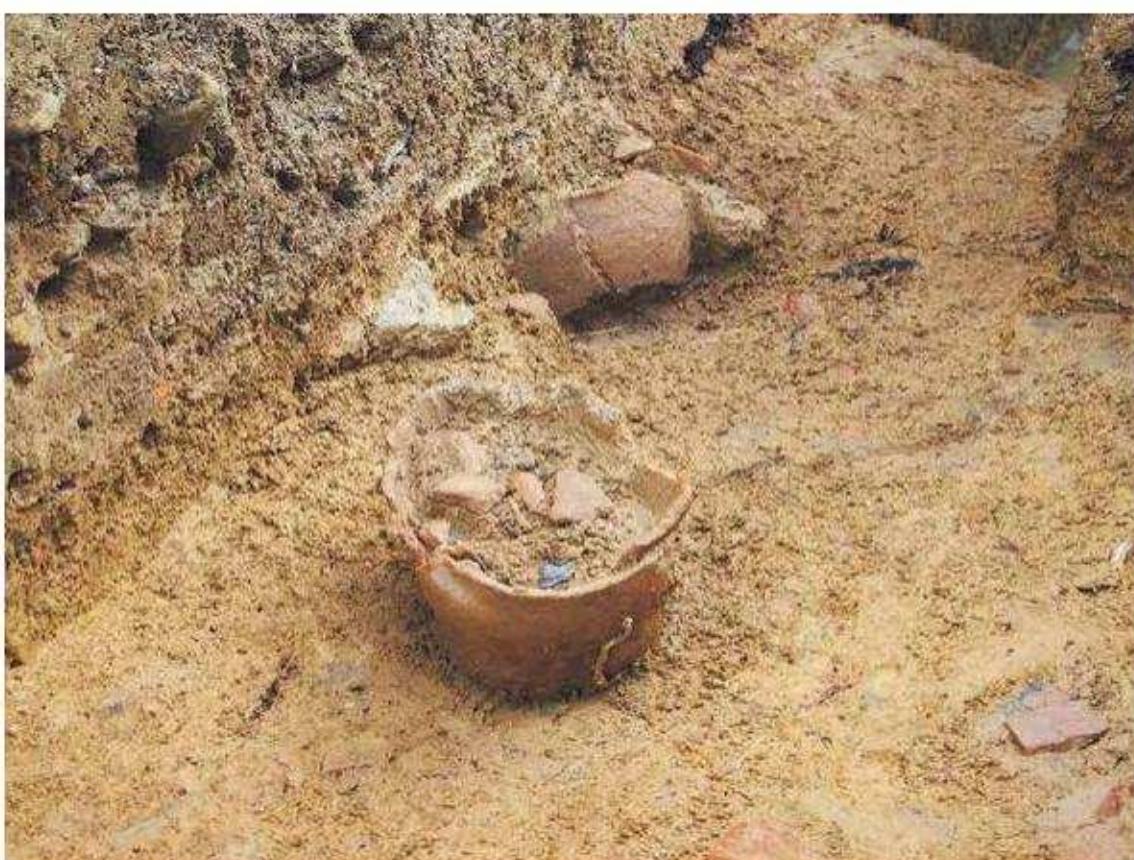
図版4-1 トレンチ2 全景（南より）



図版4-2 トレンチ2 全景（北より）



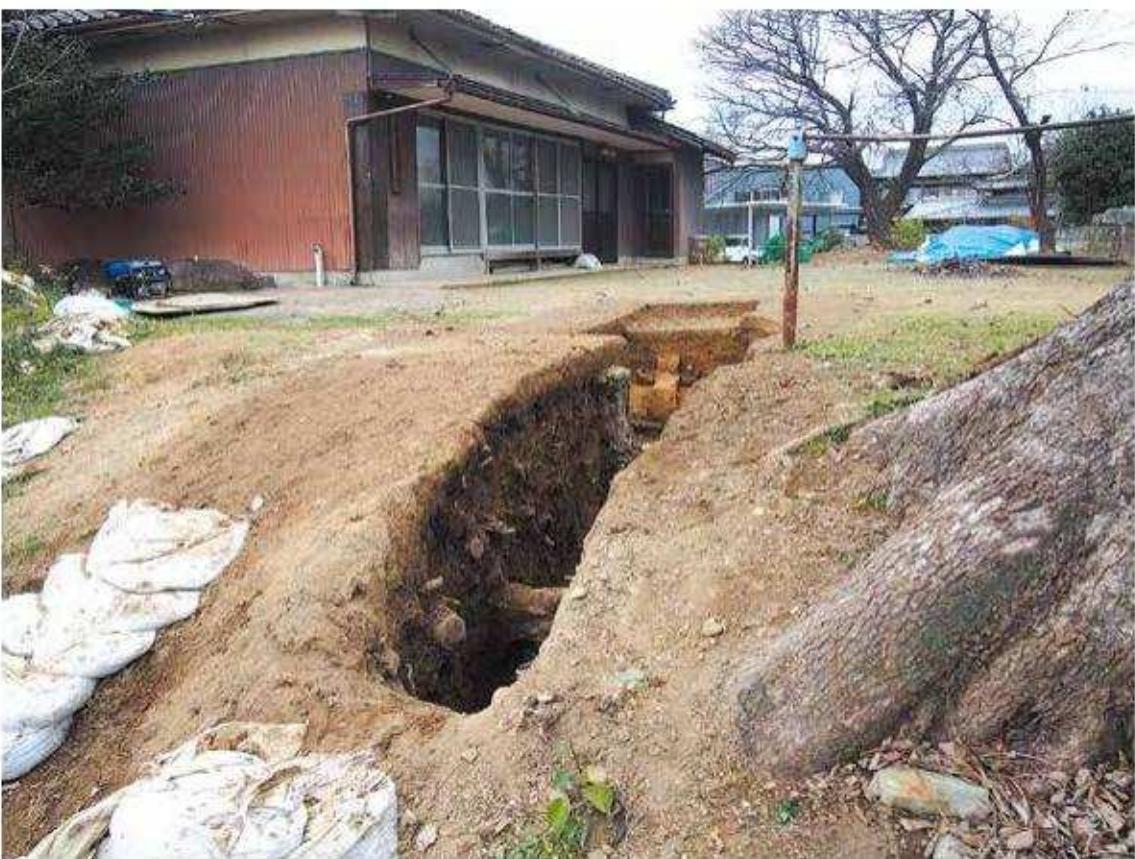
図版5-1 トレンチ2 円筒埴輪（単独樹立）検出状況1（北より）



図版5-2 トレンチ2 円筒埴輪（単独樹立）検出状況2（北より）



図版6－1 トレンチ3 全景（北より）



図版6－2 トレンチ3 全景（南より）



図版7-1 トレンチ3 周濠埋土内 軋石転落石および埴輪片検出状況（南より）



図版7-2 トレンチ3 塗裾基底石検出状況（南より）



図版 8-1 トレンチ 3 塗輪列検出状況 1 (南より)



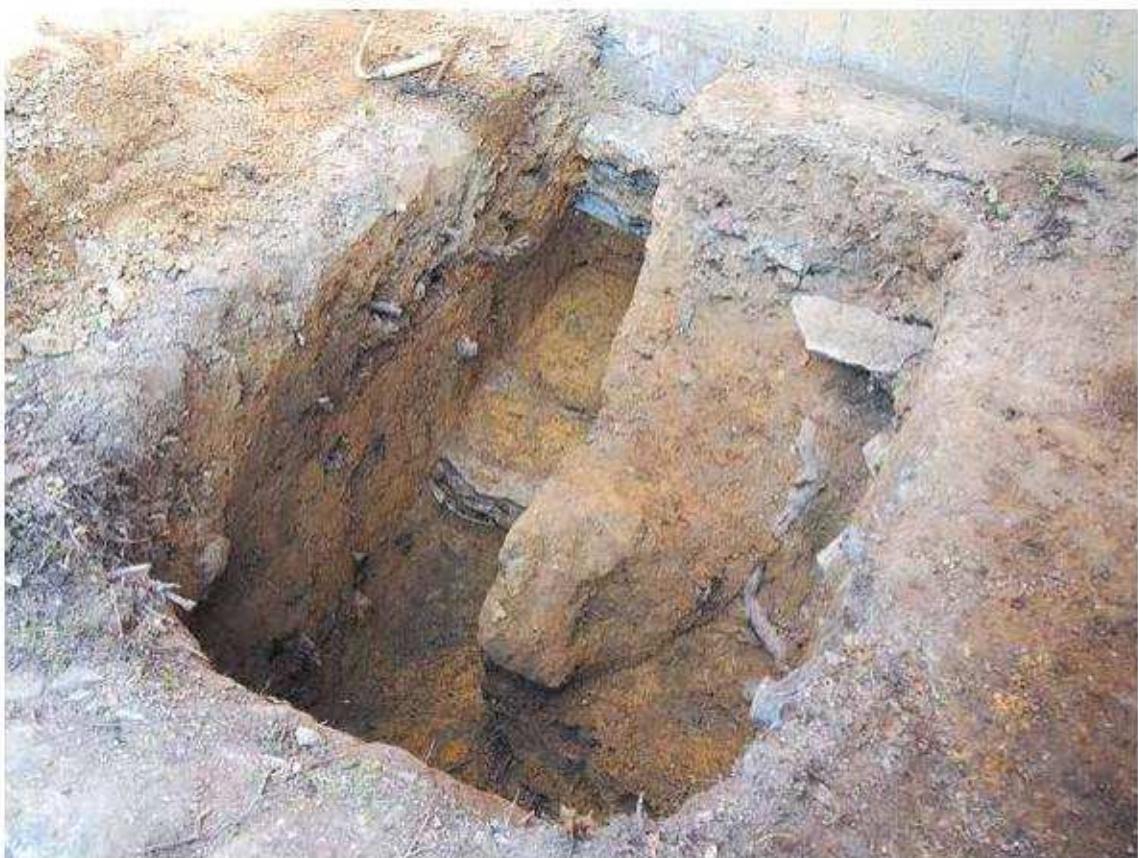
図版 8-2 トレンチ 3 塗輪列検出状況 2 (東より)



図版9－1 トレンチ4 全景（東より）



図版9－2 トレンチ4 全景（西より）



図版 10-1 トレンチ4 墓丘検出状況（西より）



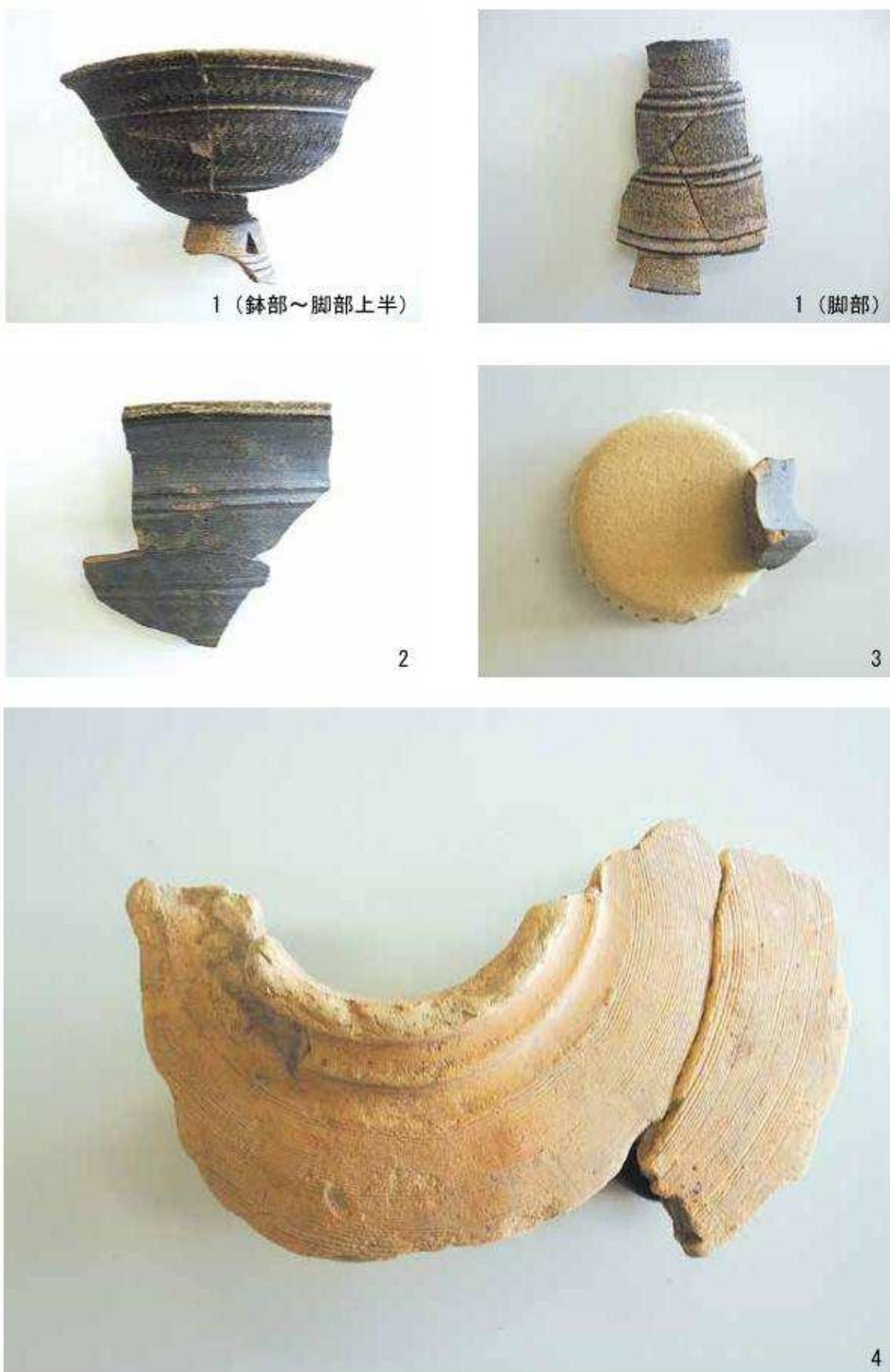
図版 10-2 トレンチ4 周濠検出状況（東より）



図版 11-1 トレンチ 4 周濠埋土内 葦石転落石及び埴輪片検出状況（西より）



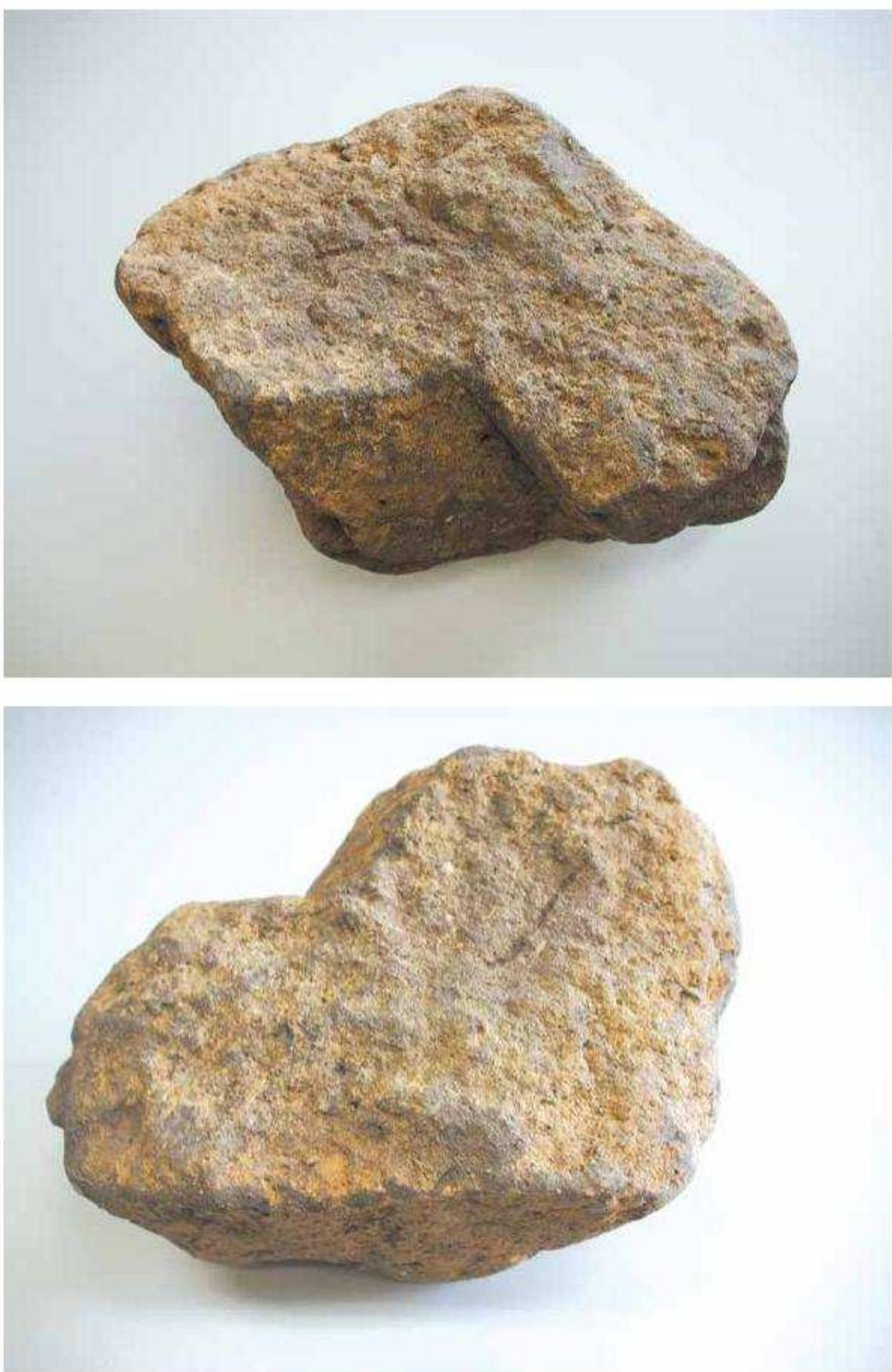
図版 11-2 トレンチ 4 周濠最深部検出状況（南より）



図版 12 出土遺物 (1)



图版 13 出土遗物 (2)



図版 14 出土遺物（3）（石棺片）

## 報 告 書 妙 錄

ふりがな	ししていしせき あおづかこふんかくにんちょうさがいほう					
書名	市指定史跡 青塚古墳確認調査概報					
副書名						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	丸本啓貴					
編集機関	観音寺市教育委員会					
所在地	〒768-8601 香川県観音寺市坂本町一丁目1番1号 TEL0875-23-3943					
発行年月日	2019.3					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	北緯	東経	発掘期間	発掘面積m <sup>2</sup>	発掘原因
あおづかこふん 青塚古墳	あかねけんかんおんじしはらちょう 香川県観音寺市原町 27・28番地ほか	34° 7' 4"	133° 42' 19"	20160811～ 20170120	30	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な造構	遺物	特記事項	
青塚古墳	古墳	古墳時代	墳丘 葺石 埴輪列 周濠	須恵器 埴輪 石棺片	確認調査により、從来言われてきた帆立貝式前方後円墳であることが確実となるとともに、外周施設である周濠や、葺石、埴輪列といった外表施設も確認することができ、出土した須恵器や埴輪の編年上の位置づけから、築造時期を5世紀中葉～後葉の間に比定することができた。また、阿蘇溶結凝灰岩の石棺片も出土する等、未調査である埋葬施設についての情報も断片的ではあるが得ることができた。	

### 市指定史跡 青塚古墳確認調査概報

2019年3月

編集・発行 観音寺市教育委員会

〒768-8601

香川県観音寺市坂本町一丁目1番1号

印 刷 株式会社 三豊印刷